

男里遺跡発掘調査概要・VI

— 府営ため池等整備事業（泉南II地区・双子上池）に伴う —

2002年3月

大阪府教育委員会

は し が き

男里遺跡は、泉南市域でいち早く調査が行われた遺跡であり、最初の調査が行われてから今年で早60年余りが過ぎようとしています。以後、本府をはじめ泉南市教育委員会などの調査により、旧石器時代から近世まで数多くの遺構や遺物が確認されており、その具体像がかなり明らかになりつつあります。

今回の調査では、縄文時代晩期、弥生時代前期、弥生時代後期末、飛鳥時代の遺構が確認されました。いずれも時代区分の境目、つまり社会全体の移行期に当たることから、移行期における各地域社会の対応状況を比較することで当時の地域性がおぼろげながらも浮かんできます。その作業の積み重ねが歴史の復元につながります。

ご紹介する資料には、男里遺跡をはじめとして、泉南地域においてこれまでにあまり確認されたことの少ない時期のものもあります。今回の調査成果を公表することで、さらに豊かな歴史像が描かれるでしょう。また、皆様にとって、遠い昔に思いをはせる新たな源となることを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査にあたり関係諸機関ならびに地元の皆様の多大なるご協力に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政になお一層のご理解とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、府営ため池等整備事業泉南Ⅱ地区（双子上池）に伴う、泉南市男里所在男里遺跡における発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課が行った。
3. 調査は、文化財保護課主査藤澤真依を担当者とし、泉南市教育委員会生涯学習課の協力を得て平成13年7月から平成14年3月まで行った。発掘調査および遺物整理に際し、泉南市教育委員会生涯学習課河田泰之氏の全面的な協力を得た。
4. 調査に要した費用は、農林水産省と文部科学省の補助金を得、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。
5. 本書で使用した座標は国土座標第Ⅵ系、方位は座標北、標高はT.P.(東京湾平均海水面)である。
6. 航空写真測量は、(株)ウエスコ大阪支社に委託し、撮影フィルムは同社において保管している。
7. 本書の執筆・編集は河田が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 既往の調査	3
第1節 図表の表記について	3
第2節 各時期における集落域	4
第3節 集落域以外の土地利用の状況	10
第4節 遺跡の動態	11
第3章 調査区の層序	14
第1節 基本層序	14
第2節 出土遺物	15
第4章 遺構と遺物	19
第1節 流路1	19
第2節 流路2	20
第3節 5層上面の遺構	32
第4節 3層上面の遺構	35
第5節 2層上面の遺構	37

第5章 まとめ	38
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と1/2500都市計画図の区割り	1
第2図 調査区に設定したグリッド	2
第3図 双子下池採集の石器	4
第4図 男里遺跡における既往の調査	5
第5図 基本層序模式図	14
第6図 3層出土遺物	14
第7図 6層出土遺物	15
第8図 5・6層出土遺物	16
第9図 調査区平面図および断面図	17・18
第10図 流路1 遺物出土状況	19
第11図 流路1 出土遺物	19
第12図 流路2 出土の磨製石剣	20
第13図 流路2 平面図および断面図-1	20
第14図 流路2-5層出土遺物	21
第15図 流路2 平面図および断面図-2	21
第16図 流路2-3層遺物出土状況	22
第17図 流路2-3層出土遺物-1	23
第18図 流路2-3層出土遺物-2	24
第19図 流路2-3層出土遺物-3	26
第20図 流路2-3層出土遺物-4	27
第21図 流路2-3層出土遺物-5	29
第22図 流路2-2層遺物出土状況	30
第23図 流路2-2層出土遺物	31
第24図 流路2-1層出土遺物	33
第25図 SX01~04・Pit01~04平・断面図	34
第26図 SX01・Pit03出土遺物	34
第27図 SX05平・断面図	35
第28図 SX05出土遺物	36

表 目 次

第1表 遺構-1	7
第2表 遺構-2	8
第3表 遺構-3	9
第4表 遺構-4	10
第5表 包含層.....	11

図 版 目 次

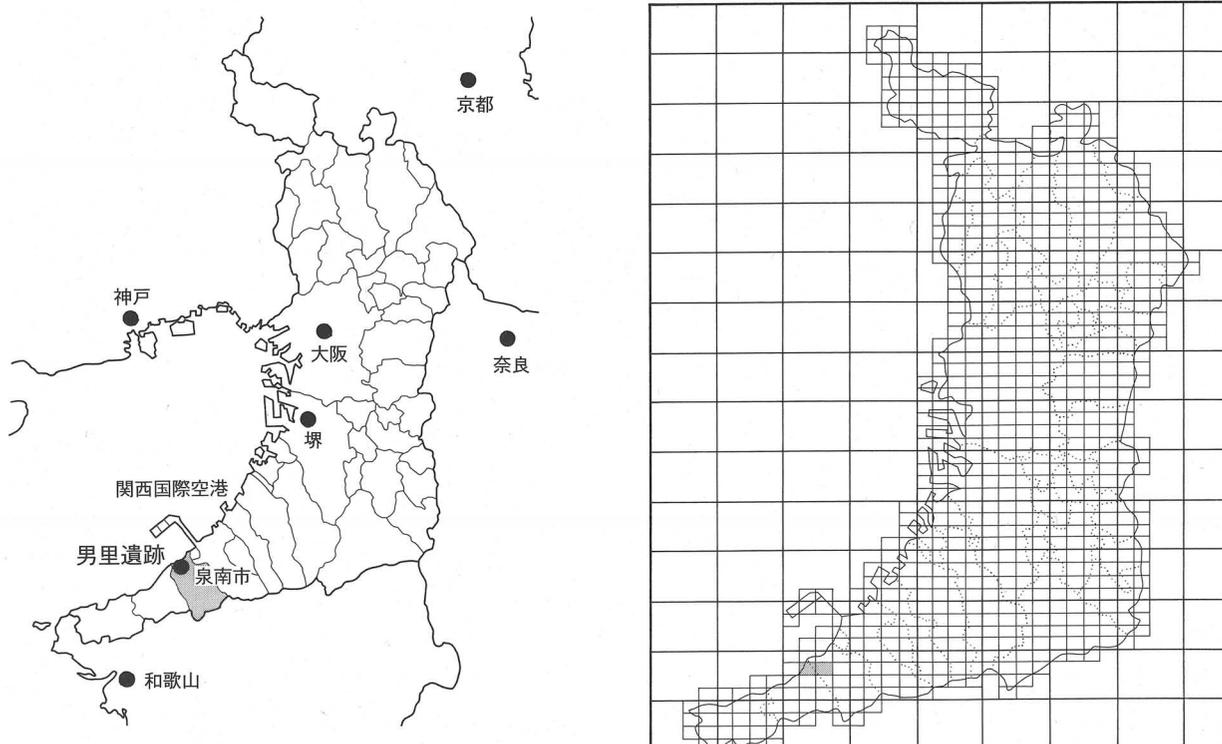
PL. 1 遺跡遠景-1
PL. 2 遺跡遠景-2
PL. 3 調査区周辺
PL. 4 調査区全景-1
PL. 5 調査区全景-2
PL. 6 5層土器出土状況-1
PL. 7 5層土器出土状況-2
PL. 8 3層土器出土状況
PL. 9 調査区断面A-B間付近
PL. 10 流路2-1
PL. 11 流路2-2
PL. 12 流路2-3
PL. 13 SX01-05、Pit01-04
PL. 14 出土遺物-1
PL. 15 出土遺物-2
PL. 16 出土遺物-3
PL. 17 出土遺物-4
PL. 18 出土遺物-5
PL. 19 出土遺物-6

男里遺跡発掘調査概要・VI

第1章 はじめに (第1・2図)

男里遺跡は、大阪南部の泉南市に位置する。遺跡として周知されている範囲は、その大半が耕作地である。調査区が位置する双子池は、遺跡のほぼ中央に位置し、金熊寺川から取水した農業用水を男里および樽井の耕作地へと供給している。今回の調査は、この双子池における堤体改修工事に伴うもので、この事業は平成7年度より5カ年にわたり継続的に行われている。このうち双子下池における堤体改修工事は平成12年度で終了し、次いで双子上池での堤体改修工事が行われることとなった。それを受け、平成13年度に双子上池における遺構および遺物の有無を確認するため、確認調査を行った。その結果、堤体改修工事が行われる範囲のうち、双子上池南東側堤体を除いた箇所において、発掘調査を行う必要があることが判明した。今年度の調査は、発掘調査が必要と判断された範囲のうち、双子上池西側堤体のうちの上池と下池を画する道路から南へ83mの区間、580㎡を対象としたものである。

現地調査では、調査区に設定したグリット単位で遺物の取り上げなどを行った。このグリットの設定は、平成7年度以降行われた調査と同じく、国土座標VI系に基づく5m四方のグリットを最小単位とする方法に準拠している。設定方法は以下の通りである。大阪府都市計画図1/2500地形図をもとに、500m四方のグリットを12区画設定し、これにA～Lまでの番号を付す。この各区画に100m四方のグリットを25区画設定し、1～25までの番号を付す。ここまでの作業で、

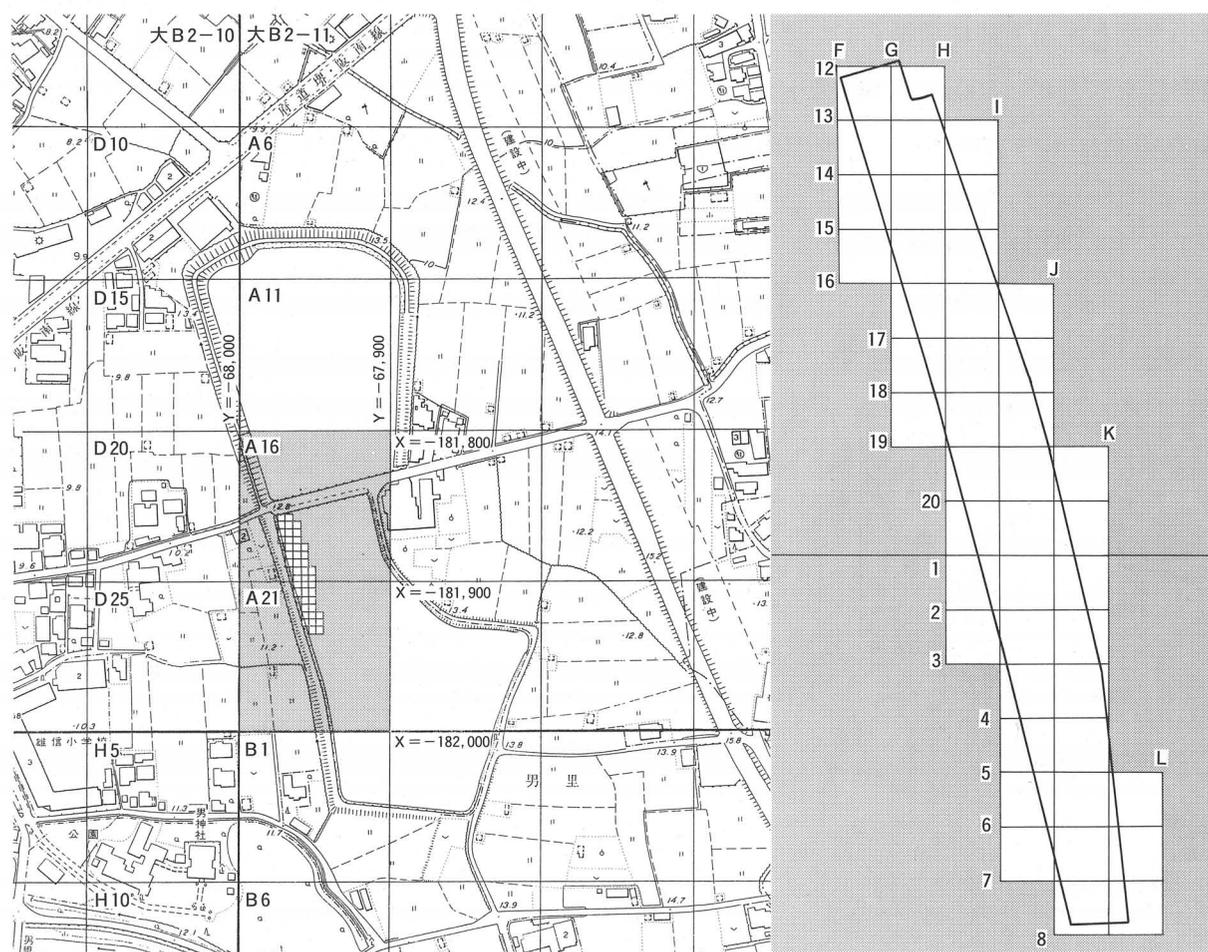


第1図 遺跡の位置と1/2500都市計画図の区割り

今回の調査区は「大B2-11-A16」および「大B2-11-A21」に含まれることとなる。さらに、100m四方グリットを400等分した5m四方グリットが最小単位となる。この100m四方のグリットを5m四方のグリットに区画する軸線のX軸にはA～T、Y軸には1～20の記号番号を付し、各グリットはグリット北西角を交差するX・Y軸の名称で呼称する。上記の作業により、調査区北西端のグリットはA16-12F、南東端のグリットはA21-7Kとなる。なお、本書における遺物の出土状況や遺構についての記載は、このグリットに基づいたものである。

現地調査では、堤体盛土および池底に溜まったヘドロの大半をバックホーで除去し、これより下層は人力掘削を行った。また、調査の迅速化、省力化をはかるため、航空写真測量による平面図化作業を行い、1/20の平面図を作成した他、併せて遺跡周辺の俯瞰写真も撮影している。調査に際し、水準はT.P.(東京湾平均海面)を使用し、断面観察などにおける土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』(1992)に準じた。

調査は、文化財保護課主査藤澤真依が担当し、泉南市教育委員会生涯学習課河田泰之の協力を得た。現地調査および本書の作成にあたっては、江尻美代子、蒲生徹幸、蔵田弘幸、田上真里、富愛、福井元気、藤野渉、真鍋紀美子らの援助を得た。また、文化財保護課西口陽一氏には、ご厚意により今回の調査で出土した磨製石剣の複元品(写真図版に掲載)を製作していただきました。記して感謝の意を表します。



第2図 調査区に設定したグリット

第2章 既往の調査（第3・4図、第1～5表）

男里遺跡ではこれまで200件以上の調査が行われている反面、遺跡自体の具体像がいまひとつはっきりとしない。ここでは過去に行われた発掘調査成果を可能な限り提示する。なお、昭和58年以前の調査のうちの数件は、内容が不明確であったために今回は取り扱っていない。また、報告書として公表されていないにもかかわらず、本書で取り扱っている調査区については、将来的に本書とは異なる評価がなされる可能性がある。

なお、今回は周知の遺跡となっている範囲内のみでの調査成果をもとに論をすすめているが、過去の集落域の範囲、もしくは集団の単位と合致するとは必ずしも言い難い。周辺遺跡については、章末にあげている各文献を参照されたい。

第1節 図表の表記について

昭和51年度から平成13年度までに男里遺跡で行われた発掘調査などのうち、遺構および遺物ともに確認されなかった調査区および、中世以前の遺構および遺物が検出された調査区をあらわしたものが第4図である。第4図では、遺構が検出されたもの、包含層のみの検出であったもの、遺構および遺物とも確認されなかったものを区別し色分けしている。さらに第5図にあらわした調査区の概要をまとめたものが第1～5表である。このうち、検出された遺構および出土遺物は第1～4表、確認された包含層は第5表にまとめている。なお、図中の調査区の表現はトレンチ形状を基本とし、トレンチ形状が不明であったもののみを丸いドットで表現し、表中の文献番号は章末の文献番号に対応する。

表中における調査成果の表現は、200件以上にものぼる成果を概観することを優先したため、多少煩雑ではあるが調査区単位ではなく遺構の種類毎にまとめている。つまり、表中の遺構は耕作痕およびピット以外は、基本的に各調査区において検出されたものを個々に抽出していることから、溝や流路などは本来同一のものを個別に表現している場合がある。遺構の表現は文献毎に表現が異なるものもあったが、検索を容易にするために表中の表現に統一した。また、確認された包含層のうち、遺構が確認された調査区（第1～4表に掲載している調査区）についてはその内容を記載していない。

表中の時期および内容の表現については、基本的には各報告書などの内容に準じているが、一部には時期設定や異なる時間軸を用いるなど、各報告書での表現方法を変更しているものもある。基本的に各文献の内容を踏襲しているため、西暦や時代区分など混在し、遺物が出土しているにもかかわらず時期を記載していないものがある。このように、異なる時間軸が混在した状態のままになっているが、本来は十分な資料の検討を行い、一定の時間軸の基に序列化する必要がある。資料はあくまで基礎資料として捉えていただきたい。

図および表中における各調査区の表現は、調査主体と調査年度をもとに記号化している。

泉南市教育委員会発行の文献のうち、報告書に正式報告として掲載されている調査区については、調査年度の西暦下二桁と各報告書における地区番号の組み合わせで「西暦下二桁－地区番号」と表現し、それ以外のものについては各文献中における地区番号のみで表現している。

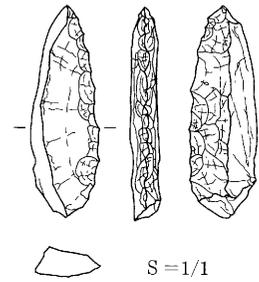
泉南市教育委員会などで調査したもののうち、未報告の調査区については、泉南市教育委員会で受理した57条の通し番号（「元号－受付番号」）を調査区名としている。

市教委が行ったトレンチ調査以外に大規模調査も行われている。遺跡中央の双子池堤体改修に伴う大阪府教育委員会による調査、遺跡を南北に縦断する府道新設に伴う(財)大阪府埋蔵文化財協会および(財)大阪府文化財調査研究センターによる調査である。

これらのうち、報告書が刊行されているものについては、図および表中では、それぞれ「府」「協」と省略し、調査年度の西暦の組み合わせで「府・協西暦下二桁」と記号化している。

府道新設に伴う調査のうち、平成5年度以降のものは未報告ではあるが、資料集としてその成果の一部が公表されている。これらの調査区については、調査主体の略称（協もしくはセ）に、既刊の資料集に準じ調査年度（元号）をつけ、同一年度において複数の調査区がある場合にのみ任意の枝番号を加え、「協・セもしくはセ元号下二桁－枝番号」と記号化している。

なお、図および表中では触れていないが双子下池にてサヌカイト製のナイフ形石器が採集されている。1995年度の双子下池堤体改修に伴う調査の際、下池南端の池底にて発見した（図3）。



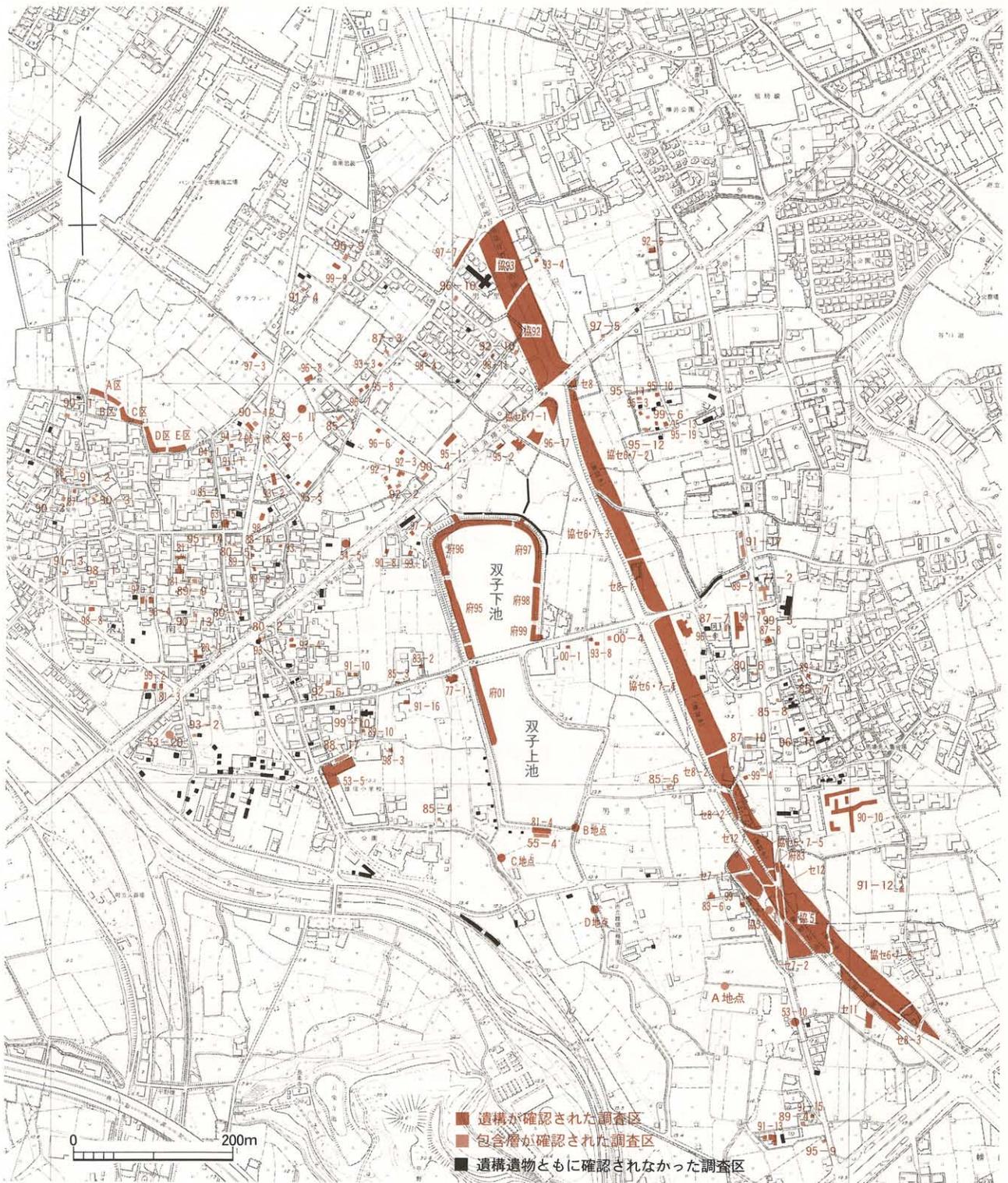
第3図 双子下池
採集の石器

第2節 各時期における集落域

ここでは遺構の存在から集落域の位置とその変遷を把握し、包含層の状況から集落域の存在する可能性のある地点を指摘する。

縄文時代では、遺跡南東部で中期末～後期初頭の土器（セ12）が確認されているが、明確な遺構に伴うものは晩期以降となる。遺跡北西部の現男里集落北東縁辺で滋賀里Ⅲ・Ⅳ式および長原式にあたる遺構が確認されている。前者は谷地形（E区、Ⅱ）、後者はピット（95-1、96-6）である。また、周辺の調査では晩期の流路（99-9、96-7）が確認されており、この流路左岸にあたる現男里集落北東縁辺に当該期の集落域の存在が想定できる。

弥生時代における集落域は、Ⅰ様式は不明、Ⅱ様式は遺跡北西、Ⅲ～Ⅳ様式は遺跡南東、Ⅴ様式後半は遺跡中央にそれぞれ位置する。Ⅰ様式の遺物が遺跡南東部（Ⅰ）で確認されているが、遺構に伴うものかは不明である。Ⅱ様式は、遺跡北西部の現男里集落北西部縁辺において谷地形（E区）が確認されている。ⅢおよびⅣ様式は、遺跡南東の馬場集落南西側において竪穴住居（協5、協セ6・7-5、セ7-1、セ12）、掘立柱建物（協5、セ12）、溝（セ7-1、セ7-2、セ8-2、セ12）、方形周溝墓（協セ6・7-4、セ11）、木棺墓（府83）、流路（協セ6、セ7-4、府98、99-3）が確認されている。限定された範囲に両時期の遺構が確認されるため、



第4図 男里遺跡における既往の調査

継続して集落域が営まれていたと捉えることができる。V様式後半のものでは、遺跡中央の双子下池の南東岸で掘立柱建物（府99）、同じく双子下池北および西岸において溝（府96）と、流路（府98、府95）が確認されている。

詳細な時期は明確ではないものの弥生時代の包含層が確認されている地点は、北西部の現男里集落内（90-12）、遺跡西部の雄信小学校（88-17）、北部の工場南側（91-4）の他は、遺構が

確認された地点に近接している（A地点、90-4、85-6）。包含層の状況から新たに集落域が確認される可能性が指摘できるのは、現在のところ90-12と88-17の周辺であろう。

古墳時代では、遺跡中央の双子下池西岸で弥生時代末から古墳時代初頭の流路（府95）および溝（府96）、古墳時代前期にあたる流路（92-1）が双子下池北西約50mの地点で確認されている。これらは一連の遺構と考えられ、遺物の出土状況から、流路左岸に当該時期の集落の存在が想定できる。これ以降、6世紀代まで遺構および包含層は確認されていない。6世紀代もしくは古墳時代後期のものでは、遺跡北西部の現男里集落北東縁辺で竪穴住居（B区、D区）、ピット（53-5、93-1）、土坑（C・E区）が確認されている。古墳時代全般における明確な包含層は確認されておらず、他の時期と対比しても、資料が現在のところかなり少ない。

7世紀代では、遺跡東部で竪穴住居・掘立柱建物・土坑（96-1）、遺跡中央の双子下池西岸で溝（府96）、7世紀後半から8世紀では遺跡中央の双子下池北岸で流路としがらみ（府96）、飛鳥時代から奈良時代では流路（府95）、奈良時代から平安時代では遺跡中央の双子池西岸で掘立柱建物（77-1）などが確認されている。なお、遺跡中央の双子下池北西（97-4）で流路、遺跡南東縁辺（91-13）で谷が確認されている。これらの遺構と双子池で確認されている流路は対応する一連の自然地形であろう。これらのことから、遺跡を南北に縦断する流路を挟んで、7世紀代には遺跡東部、8世紀前後から平安時代にかけて遺跡中央の双子池西岸遺跡東部にそれぞれ集落域が存在していたといえる。また、遺跡南西の現男里集落内（53-5）で6世紀末のピットが、遺跡東部（00-4）で古代の包含層、遺跡中央（89-10）において時期不明のピットと奈良時代の包含層が確認されているが、これらは前述の集落域の範囲を示すものと考えられる。また、遺跡北西で奈良時代と考えられるピット（II）が確認されており、集落域の存在が予想される。

平安時代後期から中世にかけての掘立柱建物が遺跡各所でみられる。平安時代では遺跡北東部（95-2）、10世紀後半では遺跡北東部（協93）、13世紀後半以前では現男里集落北東縁辺（B・C区）、平安時代末から鎌倉時代にかけては遺跡南東部（セ11）、中世では現男里集落西部（80-1）などである。

このほか90-10は、遺構面の検出だけにとどめた確認調査ではあったが、12世紀の土坑やピット、溝などが検出されている。集落域として想定してもよからう。この他、明確な年代はさだかでないが、10世紀代以前の掘立柱建物（D区）が現男里集落の北東縁辺で確認されている。隣接するE区の調査では同一遺構面において、6世紀末および10世紀後半から11世紀前半の遺構が確認されており、おそらくD区の掘立柱建物の時期は後者に対応するものと考えられる。

建物跡では14世紀以降のものが皆無であるが、現男里集落北東縁辺で14世紀代の井戸（A区）が確認されている。

寺院に関連するものでは、光平寺跡周辺（90-3、53-20、93-1）および、遺跡南東の現馬場集落南西（85-7、85-8、87-10、96-15、セ8-2^①）で瓦片の出土がみられる。いずれも、明確な寺院跡に関連する遺構は未検出だが、遺物から平安時代後期以降のものと考えられている。

第1表 遺構-1

遺構	地区	出土遺物	遺構の年代	文献
竪穴住居	協5	弥生土器	弥生Ⅲ・Ⅳ様式	29
竪穴住居	協セ6・7-5	弥生土器	弥生Ⅲ・Ⅳ様式	29
竪穴住居	セ7-1	弥生土器	弥生Ⅲ・Ⅳ様式	29
竪穴住居	セ12	弥生土器	弥生Ⅳ様式	29
竪穴住居	83-6	弥生土器	弥生	4
竪穴住居	B区	須恵器・土師器	6世紀初頭	21
竪穴住居	D区	須恵器・土師器・滑石製紡錘車	6世紀前半	21
竪穴住居	E区	—	10世紀後半以前	21
竪穴住居	96-1	土師器	7世紀前半	16
掘立柱建物	協5	弥生土器	弥生Ⅲ・Ⅳ様式	29
掘立柱建物	セ12	弥生土器	弥生Ⅲ・Ⅳ様式	29
掘立柱建物	府99	弥生土器	弥生末	27
掘立柱建物	96-1	—	7世紀後半	16
掘立柱建物	77-1	須恵器・土師器・黒色土器A類	奈良-平安	1
掘立柱建物	協93	土師器・黒色土器A類・真蛸壺	10世紀後半	28
掘立柱建物	D区	土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	須恵器・土師器・土師質真蛸壺	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	土師器・製塩土器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	縄文土器・須恵器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	黒色土器B類・土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	—	10世紀以前	21
掘立柱建物	D区	土師器	10世紀以前	21
掘立柱建物	95-2	黒色土器A類	平安時代	15
掘立柱建物	B区	—	13世紀後半以前	21
掘立柱建物	C区	—	13世紀後半以前	21
掘立柱建物	セ11	黒色土器・瓦器・土師器	平安末-鎌倉	29
掘立柱建物	80-1	須恵器・土師器・瓦器	中世	2
掘立柱建物	89-7	—	—	8
ピット	95-1	縄文土器・直上包含層で浮線文土器,石鏃・錐	縄文晩期(長原式)	15
ピット	96-6	縄文土器・石製品	縄文晩期(長原式)	16
ピット	93-1	須恵器・土師器	古墳後期?	12
ピット	53-5	—	6世紀末	—
ピット	II	?	奈良	14
ピット	D区	黒色土器A類・真蛸壺	10世紀以前	21
ピット	E区	—	10世紀後半以前	21
ピット	96-4	黒色土器	—	16
ピット	93-7	土師器	—	13
ピット	94-1	土師器	—	13
ピット	91-13	土師器	—	10
ピット	89-1	瓦器	中世	8
ピット	81-2	瓦器	中世	3
ピット	96-5	土師器	中世	16
ピット	89-8	瓦器・白土器・土師器	中世	8
ピット	D地点	—	—	1
ピット	80-1	—	—	2
ピット	81-1	—	—	3
ピット	83-2	—	—	4
ピット	85-2	—	—	5
ピット	89-10	—	—	8
ピット	90-7	—	—	9
ピット	90-8	—	—	10
ピット	91-16	—	—	11
ピット	92-6	—	—	11
ピット	96-11	—	—	16
ピット	97-1	—	—	18
ピット	97-7	—	—	18

第2表 遺構-2

遺構	地区	出土遺物	遺構の年代	文献
ピット	98-7	—	—	19
ピット	99-2	—	—	19
ピット	99-1	—	—	19
ピット	00-1	—	—	20
ピット	府97	弥生土器	弥生V様式後半	25
ピット	53-10	—	—	—
井戸	セ12	軒瓦・道具瓦	平安後期-室町	29
井戸	A区	瓦器・土師器	14世紀	21
鍛冶炉	セ11	焼土塊・鍛造剥片・フィゴ羽目・スラッグ	平安末-鎌倉	29
土坑	セ8-2	弥生土器	弥生III・IV様式	29
土坑	91-15	被熱粘土塊	弥生中期後半	11
土坑	00-1	弥生土器	弥生末	20
土坑	96-18	弥生土器	弥生	17
土坑	C区	須恵器・土師器	6世紀	21
土坑	E区	須恵器	6世紀末	21
土坑	96-1	土師器・須恵器・製塩土器・動物遺体・スラッグ・窯体	7世紀後半	16
土坑	協93	土師器・黒色土器A・B類・須恵器・緑釉・鉄釘・土錘・真蛸壺・鉄滓	10世紀後半代	28
土坑	セ11	黒色土器・瓦器・土師器・焼土塊・中国製磁器	平安末-鎌倉	29
土坑	セ8-2	軒瓦・道具瓦	平安後期-室町	29
土坑	98-7	黒色土器A類	—	19
土坑	77-1	須恵器・土師器・緑釉陶器	—	1
土坑	E区	黒色土器A類・土師器・須恵器・土錘	10世紀後半-11世紀前半	21
土坑	D区	黒色土器A・B類・灰釉・土師器	10世紀以前	21
土坑	D区	須恵器・土師器・スラッグ	10世紀以前	21
土坑	C区	瓦器・真蛸壺・焼土	13世紀後半以前	21
土坑など	90-10	瓦器	12世紀(確認調査)	9
土坑	C区	瓦器・焼土	13世紀後半以前	21
土坑	D区	須恵器	13世紀後半以前	21
土坑	D区	須恵器・製塩土器	13世紀後半以前	21
土坑	D区	—	13世紀後半以前	21
土坑	D区	—	13世紀後半以前	21
土坑	D区	真蛸壺・焼土	13世紀後半以前	21
土坑	D区	焼土・被熱河原石	13世紀後半以前	21
土坑	D区	土師器・真蛸壺	13世紀後半以前	21
土坑	B区	土師質真蛸壺	13世紀初頭	21
蛸壺焼成土坑	D区	真蛸壺・焼土	13世紀後半以前	21
蛸壺焼成窯	B区	土師質真蛸壺・焼土(ロストル)	13世紀初頭	21
土坑	97-3	瓦器・土師器	中世	17
土坑	89-1	?	中世	8
土坑	87-1	土師器・瓦器・瓦質土器・丸瓦・貨銭	中世	6
土坑	80-1	土師小皿・蛸壺	中世	2
土坑	89-8	土師器・瓦器	中世	8
土坑	90-7	須恵器・土師器	—	9
土坑	93-7	土師器	—	13
土坑	95-19	土師器	—	16
土坑	99-4	軒丸瓦・軒平瓦	—	19
土坑	93-2	軒丸瓦	—	13
土坑	93-1	瓦・土師質土器	—	12
土坑	85-2	—	—	5
土坑	87-8	—	—	6
土坑	89-10	—	—	8
土坑	89-2	—	—	8
土坑	91-1	—	—	10
土坑	91-13	—	—	10
土坑	92-1	—	—	11
土坑	92-6	—	—	11
土坑	93-4	—	—	12
土坑	95-10	—	—	16
土坑	95-13	—	—	16
土坑	98-3	—	—	18
土坑	97-7	—	—	18
土坑	府97	—	—	25

第3表 遺構-3

遺構	地区	出土遺物	遺構の年代	文献
方形周溝墓?	協セ6・7-4	?	弥生III・IV様式	29
方形周溝墓	セ11	弥生土器	弥生IV様式	29
木棺墓	府83	?	弥生III様式後半	22・29
土坑墓	88-1	瓦器・土師器・真蛸壺	中世	7
小石室	54-5	-	-	22
溝	セ7-1	弥生土器	弥生III・IV様式	29
溝	セ7-2	弥生土器	弥生III・IV様式	29
溝	セ8-2	弥生土器	弥生III・IV様式	29
溝	セ12	弥生土器	弥生III・IV様式	29
溝	セ8-2	弥生土器・真蛸壺	弥生III・IV様式	29
溝	97-1	弥生土器	弥生V様式末	17
溝	府97	サヌカイト・石鏃・剝片	-	19
溝	府96	弥生土器・土師器・製塩土器・庄内式甕・布留式甕	弥生末-古墳初頭	24
溝	92-1	須恵器・土師器	7世紀	11
溝	53-5	-	6世紀末	-
溝	府96	須恵器・土師器・製塩土器	7世紀中葉	24
溝	97-7	土師器	8世紀後半	18
溝	88-16	土師器	-	15
溝	90-7	土師器	-	8
溝	E区	-	10世紀後半以前	21
溝	D区	黒色土器B類・瓦器・灰釉・青磁	13世紀後半以前	21
溝	セ8-2	軒瓦・道具瓦	平安後期-室町	29
溝	II	瓦器	中世	14
溝	77-1	瓦器	中世	1
溝	81-3	瓦器	中世	3
溝	81-1	瓦器	中世	3
溝	81-2	土師器	中世	3
溝	90-8	土師器	中世	10
溝	92-1	須恵器・土師器	中世	11
溝	85-3	弥生土器・須恵器・土師器	-	5
溝	C地点	-	-	1
溝	89-8	-	-	8
溝	89-10	-	-	8
溝	89-2	-	-	8
溝	99-1	-	-	9
溝	91-1	-	-	10
溝	91-10	-	-	10
溝	95-1	-	-	25
耕作痕	C区	-	13世紀後半	21
耕作痕	B区	-	13世紀後半	21
耕作痕	E区	-	14世紀後半	21
耕作痕	協92	-	14-15世紀	28
耕作痕	協93	-	14-15世紀	28
耕作痕	93-8	-	中世-近世	13
耕作痕	91-10	土師器	-	10
耕作痕	92-1	-	-	11
耕作痕	95-3	土師器	-	15
耕作痕	94-2	-	-	13
整地土	93-3	瓦	-	13
整地土	C地点	-	-	1
流路	99-9	縄文土器	縄文後期-晩期	20
流路	96-7	縄文土器・弥生土器	縄文晩期以降	16
流路	協セ6・7-4	弥生土器	弥生III・IV様式	29
流路	府98	弥生土器	弥生III・IV様式	26
流路	99-3	弥生土器	弥生III・IV様式	19
流路	府98	弥生土器・製塩土器	弥生V様式後半	26
流路	98-8	弥生土器	弥生	19
流路	府95	弥生土器・製塩土器・庄内式甕・布留式甕	弥生末-古墳初頭	23
流路	92-1	土師器・弥生土器	弥生中期-古墳前期	11
流路	97-4	弥生土器・土師器・須恵器	弥生後期-奈良	17
流路	92-3	土師器・弥生土器	弥生以降	11
流路 しがらみ	府96	土師器・須恵器	7世紀中葉-8世紀	24

第4表 遺構-4

遺構	地区	出土遺物	遺構の年代	文献
流路	府95	須恵器・土師器・木製品・窠体片・土馬・墨書土器	飛鳥-奈良	23
流路	89-6	須恵器	古代	8
流路	81-4	—	—	3
流路	88-16	—	—	8
流路	93-3	—	—	12
流路	95-8	—	—	15
流路	98-4	—	—	18
流路	府97	—	—	25
谷	II	縄文土器	縄文晩期（滋賀里Ⅲ式）	14
谷	E区	縄文土器・石器・石棒	縄文晩期（滋賀里Ⅳ式）	21
谷	E区	弥生土器・石器・石材・石鋸	弥生Ⅱ様式	21
谷	96-8	土師器	—	16
谷	91-13	弥生土器・土師器・須恵器	弥生中期-7世紀初頭	10

77-1を含め、平安時代から中世にかけての集落域の推移をみると、遺跡中央および北東部（77-1、95-2、協93）が平安時代を通じて、その後13世紀後半以前までは現男里集落北東縁辺（D区→B・C区）で、平安時代末から鎌倉時代までは遺跡南西部（90-10、セ11）で、詳細な時期は不明であるが中世では現男里集落内西部（80-1）でそれぞれ営まれていることがわかる。14世紀以降の集落域は、井戸（A区）の確認された付近に想定できる。

瓦類を除いた包含層の分布をみると、現男里集落西部に数多く分布する（90-1、91-2、90-3、90-2、98-1、80-5、90-13、80-4、80-2）他、遺跡東部の現馬場集落西側（91-17、77-2、80-6）にも比較的集中しているように見える。前者は中世の集落域が現男里集落に重複することを示唆し、後者は90-10周辺の現馬場集落西側における集落域の範囲をおおまかにつかむことができる。なお、特筆すべき遺構として13世紀代の真蛸壺を焼成するための土坑およびロストルをもつ窯（B・D区）、平安時代末から鎌倉時代までの集落域において鍛冶炉（セ11）が確認されている。

第3節 集落域以外の土地利用の状況

ここでは、遺跡内における集落域以外の土地利用を把握する手掛かりとして、耕作痕、灌漑施設と考えられる遺構の分布をみる。

7世紀代では双子上池北岸において流路としがらみ（府96）が確認されている他、それに関連すると想定される溝（92-1）がみられる。この他、遺跡北端（97-7）で検出された溝もその可能性が想定できる。

13世紀後半から14世紀後半の耕作痕が現男里集落北東縁辺（C・B・E区）で、14世紀から15世紀の耕作痕が遺跡北西部（協92・93）で確認されている。中世の灌漑施設と考えられる溝が遺跡北部（II、92-1）で確認されており、現在の水路網を参考にすれば現男里集落東側周辺へ用水を供給するものであったと想定できる。

中世における灌漑施設の可能性が考えられる溝としては、双子池周辺（90-8、77-1）、現男里集落西側（81-1、81-2、81-3）のものがあげられる。

第5表 包含層

地区	出土遺物	年代	文献	地区	出土遺物	年代	文献
セ12	縄文土器	縄文中期末-後期初頭	29	99-5	土師器	-	19
90-4	縄文土器・弥生土器・須恵器	-	9	77-2	瓦器	中世	1
I	弥生土器	弥生前期	14	80-6	瓦器	中世	2
55-4	大型石包丁	弥生	22	90-12	瓦器	中世	10
A地点	弥生土器	-	1	95-9	瓦器	中世	15
90-12	弥生土器	-	10	98-1	瓦器	中世	18
91-4	弥生土器・須恵器・瓦器碗・土師器・蛸壺	-	10	80-5	瓦器・土師器	中世	2
88-17	弥生土器・須恵器・土師器	-	8	80-4	瓦器・土師器	中世	2
85-6	弥生土器・土師器・陶器・サヌカイト剥片	-	5	90-2	瓦器・土師器	中世	9
95-14	須恵器・陶器	-	16	85-1	瓦器・真蛸壺	-	5
85-4	須恵器	-	5	95-11	瓦器・土師器	-	16
87-3	須恵器	-	6	80-2	瓦器・土師器・蛸壺・土錘	中世	2
90-12	須恵器	-	10	99-6	瓦器・真蛸壺・土師器	中世	19
00-4	須恵器・土師器	古代	20	90-3	瓦質土器・師器・蛸壺・陶器・平瓦・丸瓦	-	9
89-10	須恵器・土師器	奈良	8	91-2	蛸壺	中世	10
96-10	須恵器・土師器	-	16	89-4	土師器	中世	8
99-10	須恵器・土師器	-	20	90-1	土師器・須恵器・瓦質蛸壺	-	9
89-9	須恵器・土師器・製塩土器	-	8	90-13	土師器	中世	10
93-2	須恵器・土師器・釣鐘形真蛸壺	中世	12	92-2	土師器	中世	11
87-7	土師器	-	6	91-17	土師器	中世	11
91-3	土師器	-	10	91-12	土師質土器	-	10
92-5	土師器	-	11	96-9	土師質土器	中世	16
92-10	土師器	-	12	53-20	仏像文軒丸瓦・蛸壺(光平寺跡内)	平安時代後期	22
95-12	土師器	-	16	96-15	瓦	中世	16
97-5	土師器	-	17	85-8	平瓦	-	5
				85-7	平瓦	-	5
				87-10	平瓦	-	6

このほかには、灌漑施設および耕作地に関する資料は得られていないが、これまで調査があまり行われていない遺跡南東部および北西部の現在も耕作地として利用されている区域にその存在が想定できる。

なお、遺跡内で唯一、協92・93では花粉分析およびプラントオパール分析が行われている^②。いずれの層位からも耕作土であった確証は得られなかったとしながら、同調査で検出された耕作痕に伴う時期では、稲作およびアブラナ、ソバ、マメの栽培の可能性が指摘されている他、それ以前（古代）および以後（近世）では稲作、ソバ・アブラナ栽培の可能性が指摘されている。

第4節 遺跡の動態

以上の資料から男里遺跡における各時期の状況についてみたい。

縄文時代晩期では、滋賀里Ⅲ・Ⅳ式、長原式における集落域が、現男里集落の北東縁辺に存在している想定できる。これらの調査区では、浮線網状文浅鉢（95-1）が1点確認されている他、河内の胎土をもつ土器が一定量みられる（95-1、E区、II）。また、破損した石棒片が2点出土している（E区）。

弥生時代では、Ⅱ様式、Ⅲ・Ⅳ様式、Ⅴ様式後半から末で集落域が異なる。Ⅱ様式のもの現男里集落の北東縁辺、Ⅲ・Ⅳ様式は遺跡南東部、Ⅴ様式後半から末は遺跡中央の双子池の東西両岸にそれぞれ集落域が確認もしくは想定される。

Ⅱ様式では緑色片岩、紅簾片岩、流紋岩（E区）、Ⅲ・Ⅳ様式では緑色片岩（セ12などⅢ・Ⅳ

様式の遺構を検出した一連の調査)といった他地域から搬入された石材がみられる他、II様式には石鋸と考えられる紅簾片岩製の石器がみられる(E区)。土器についてもIII・IV様式では河内および紀伊の胎土をもつもの(セ12などIII・IV様式の遺構を検出した一連の調査)がみられる。

集落の縁辺にIII・IV様式の方形周溝墓(協セ6・7-4、セ11)が確認されているが、集落内にもIII様式後半の木棺墓(府85)がみられるのは興味深い。また、III・IV様式の集落域を画する大溝がみつまっている(セ7-1、セ7-2、セ12)。V様式末には製塩土器がみられるようになり、古墳時代初頭まで行われていたことが確認されている(府95・96)。それにやや遅れて庄内式甕、布留式甕(府95・96)がみられるようになる。

古墳時代では、遺跡中央の双子下池西岸付近において弥生時代末から継続して古墳時代初頭まで集落域が存続するようである(府95・96)。6世紀代には現男里集落北東縁辺(B・C・D・E区)で集落域が確認されており、竪穴住居から滑石製紡錘車が出土している(D区)。なお、前代盛んであった土器製塩活動の痕跡は、初頭以降皆無である。

7世紀代から8世紀にかけて、遺跡東部(96-1)、双子下池西側(府95・96、77-1)で集落域の存在が想定でき、包含層や遺構の分布(53-5、89-10、00-4)からおおよその両集落の範囲をつかむことができる。この他、遺跡北西部でも集落域の存在が想定できる(II)。上記の調査区では製塩土器、漁労具などの他、土馬も出土している(府95・96、96-1)。双子下池西岸で確認された流路から窯体片や焼けひずみのみられる須恵器が出土しており(府95)、付近に須恵器窯の存在が想定できる。文字資料では墨書土器が2点確認されている(府95)。うち1点は「大」、もう1点は不明。なお、双子下池でしがらみ(府96)が確認されており、遺跡内における明確な灌漑施設の痕跡は現在のところこれが初源となる。

平安時代から中世にかけての集落の存続期間には、3つのパターンがみられる。奈良時代から平安時代まで、平安時代のみ、平安時代末から室町時代頃までのものである。奈良時代から平安時代まで双子下池西側において集落(77-1)が営まれ、これにややおくれで遺跡北東(協93、95-2)で集落があらたに出現する。併存したであろう両集落の経営期間は平安時代頃までで、平安時代末からあらたな集落域が出現する。ひとつは、現在の男里集落の北東縁辺(B・C・D区)および西部(80-1)、もうひとつは遺跡の南東(90-10、セ8-2)である。これまで推定されている寺院跡もこれに対応するかのようになり、前者の付近には光平寺、後者の付近には安養寺が存在する。後者は室町時代の瓦も出土していることから両集落域と両寺院は併存していた可能性が指摘できる。

また、これらの集落域の縁辺に14世紀以降の耕作地が確認されているが、集落域の位置関係から、現在確認されている耕作地(B・C・E区、協92・93)は現男里集落北東縁辺の集落に対応するものであろう。

中世の灌漑水路も確認されている(II、92-1)が、現時点の資料では具体的な灌漑体系の復元には不十分である。ただ、前述の両集落は、灌漑水系からみれば異なる水系を維持していた可

能性が考えられる。現在の水路網を参考にすると、遺跡北西部の集落はおそらく集落南側で金熊寺川から取水し、遺跡南西部の集落は更に上流において金熊寺川から取水し長山丘陵西側から延々水路網を築いて用水をまかっていたと想定できる^③。両者が完全に独立した灌漑水系を維持していたとは考えにくく相互に補完していたのであろうが、地形的な制約からそれぞれが独自の灌漑水系としてある一定の範囲を管理していた可能性は高い。

さらに、両集落は異なる生業をもつ集団であった可能性が指摘できる。遺跡北西部の集落域において鎌倉時代頃の真蛸壺を焼成する土坑および窯がみついている他、土錘などの漁労に関わる遺物が散見されるが、遺跡南東の集落では漁労具の出土は無いようである。遺物の出土状況は報告書の刊行を待たねばならないが、出土遺物の差異から前者が農業と漁業、後者が農業をそれぞれ生業とする集団であったとも考えられる。

以上のことから、平安時代末以降に形成されたふたつの集落域が、鎌倉時代以降には耕作地、灌漑水系、寺院、生業などで互いに独立し、他集落とは社会的に独立した存在として分化していたことが想定できる。現在の景観のもとになるものであろう。

註釈

- ① 安狼寺という寺の存在が指摘されている。文献29参照。
- ② 文献28参照。
- ③ 泉南市教育委員会2001『上代石塚遺跡発掘調査報告書』

文献

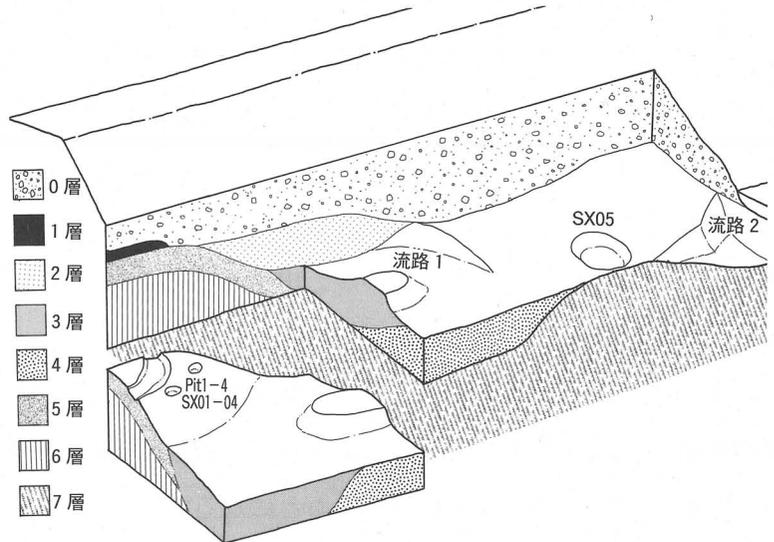
- 1 泉南市教育委員会1978『男里遺跡発掘調査報告書』
- 2 泉南市教育委員会1981『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 3 泉南市教育委員会1982『男里遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 4 泉南市教育委員会1984『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』
- 5 泉南市教育委員会1986『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
- 6 泉南市教育委員会1988『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』
- 7 泉南市教育委員会1989『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
- 8 泉南市教育委員会1990『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
- 9 泉南市教育委員会1991『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』
- 10 泉南市教育委員会1992『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』
- 11 泉南市教育委員会1993『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』
- 12 泉南市教育委員会1994『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』
- 13 泉南市教育委員会1995『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 14 泉南市教育委員会1995『泉南市文化財年報No.1』
- 15 泉南市教育委員会1996『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 16 泉南市教育委員会1997『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 17 泉南市教育委員会1998『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 18 泉南市教育委員会1999『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 19 泉南市教育委員会2000『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 20 泉南市教育委員会2001『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』
- 21 泉南市教育委員会2002『男里遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- 22 泉南市史編纂委員会1987『泉南市史通史編』
- 23 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- 24 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
- 25 大阪府教育委員会1998『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』
- 26 大阪府教育委員会1999『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』
- 27 大阪府教育委員会2000『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』
- 28 財大阪府埋蔵文化財協会1994『男里遺跡』
- 29 財大阪府文化財調査研究センター2001『男里遺跡発掘調査資料集』

第3章 調査区の層序 (第5～9図、PL. 1～9・14・15)

第1節 基本層序

調査では、堤体盛土と地山以外は、自然流路の埋土であることが確認された。第5図は、基本層序を模式的にあらわしたもので、断面のうち破線で表現している箇所は、推定である。

0層 堤体盛土および池底のヘドロである。調査区西側断面をみると、いずれもきわめて新しい盛土であろうことが推測される。調査区西側断面をみると、



第5図 基本層序模式図

堤体盛土は直下の層位を掘り込んで窪みになっている箇所がみられ、0層直下が遺構面になる調査区東側などでは、削平による窪みがあちこちにみられる。

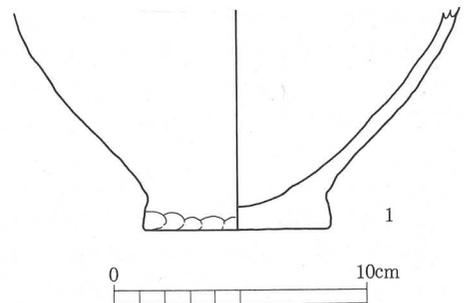
1層 遺構面直上の包含層である。0層により大きく削平を受け、調査区南西端のごく一部、A21-6 J・7 Jにのみ遺存していた。黒褐色シルト。遺物は土師器の細片が極少量出土した。

2層 直下調査区中央付近でみられる。1層が分布するごく一部を除いて、0層の直下でみられ、褐色系のシルトや礫層からなる。後述する流路2の埋土と考えられ、上面でピット (Pit 05・06) を検出している。遺物は土師質の細片が少量出土したのみである。

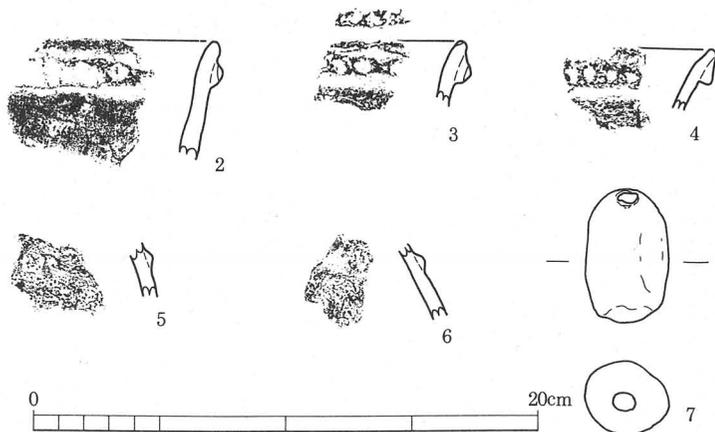
3層 調査区のほぼ全域にみられる。黄色～灰色系のシルトおよび礫層からなる。この上面で、土坑 (SX05)、自然流路 (流路1・2) を確認した。検出した遺構には、7世紀中頃から後半のものと、弥生時代後期末のものがある。なお、A16-14 Fで検出された⑭層で弥生時代中期 (Ⅲ様式) の壺が出土しており、後述する4層をベースとする弥生時代中期中葉から後期末までの自然流路の埋土と捉えることができる。

4層 調査区中央でみられる。2層および3層を埋土とする河川のベースとなり、黄色～灰色の粗砂および礫からなる。遺物は出土していない。

5層 調査区南側でみられる。灰黄色シルトからなり、上面で土坑 (SX01-04)、ピット (Pit 01-04)、自然流路 (流路1) を検出した。なお、⑳層から突帯文土器深鉢、㉑層から弥生前期の壺が出土している。出土した土層には、炭化物および固まりではないが赤褐色の焼土らしきひろがりが見られる。



第6図 3層出土遺物



第7図 6層出土遺物

6層 調査区南側でみられる。黄色～灰色の細砂およびシルトからなる。調査区断面でいうと南の⑩層上面で焼土層がみられることから、遺構面と考えられる。この遺構面は南北方向にレベルを下げており、標高10.0～9.2mとなる。突帯文土器深鉢（2～6・8）、土錘（7）が出土している。

7層 地山である。今回の調査では、調査区南北両端でのみ検出した。明青灰色礫からなり、ほぼ起伏なく堆積している。上面のレベルは9.2m前後である。

第2節 出土遺物

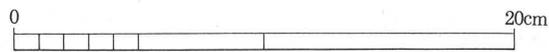
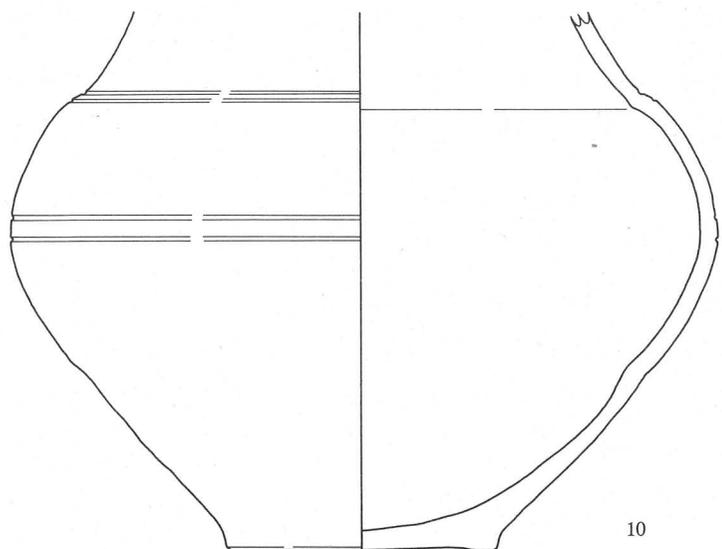
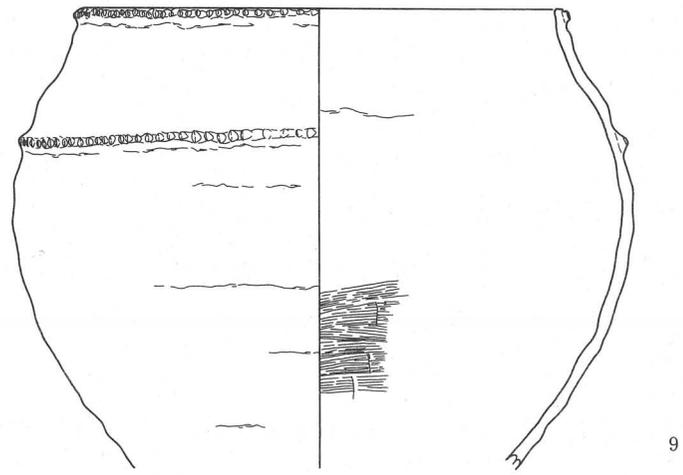
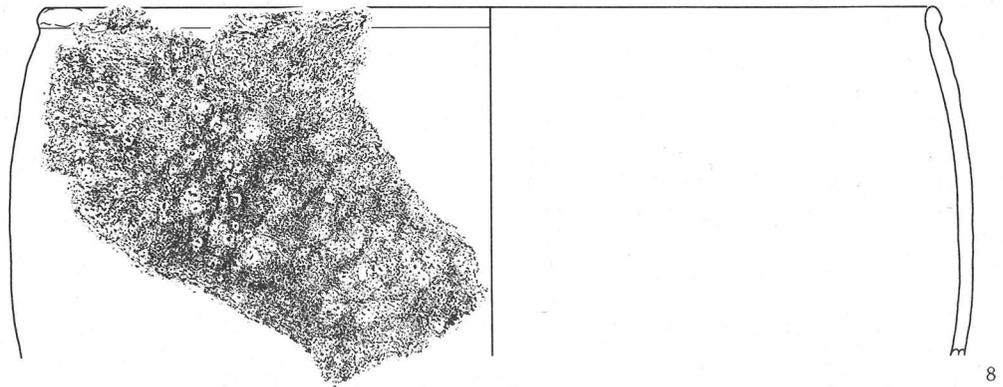
1は3層（断面図の⑭層）から出土。弥生土器壺もしくは甕である。底径8.7cm。器壁の摩耗が激しい。外面に縦方向のヘラケズリ、底部付近にはユビオサ、内面はナデがみられる。Ⅲ様式。

9・10は5層（9は断面図の⑳層・10は断面図の㉑層）から出土。9は縄文土器深鉢である。口径19.4cm。口縁端部のやや下、および体部最大径付近に断面三角形の突帯をもつ。突帯の仕上げは、いずれも突帯上下を強くナデつけている。刻目の形状は、D字。刻目は、工具を斜めにねかした状態で土器に正対して右斜め方向から施文されている。内外面ともナデ、内面底部付近にはハケメ状の横方向の調整痕がみられる。胎土は河内。長原式。10は弥生土器壺である。底径10.8cm。器壁の摩耗が激しい。体部外面には、横方向のヘラミガキがみられ、内面は不明。頸部と体部の境目および体部最大径付近に、それぞれ2条のヘラ描き沈線がごく一部にのこる。いずれも外面をめぐっていたものと考えられる。Ⅰ様式でも古相のものか。胎土は在地。

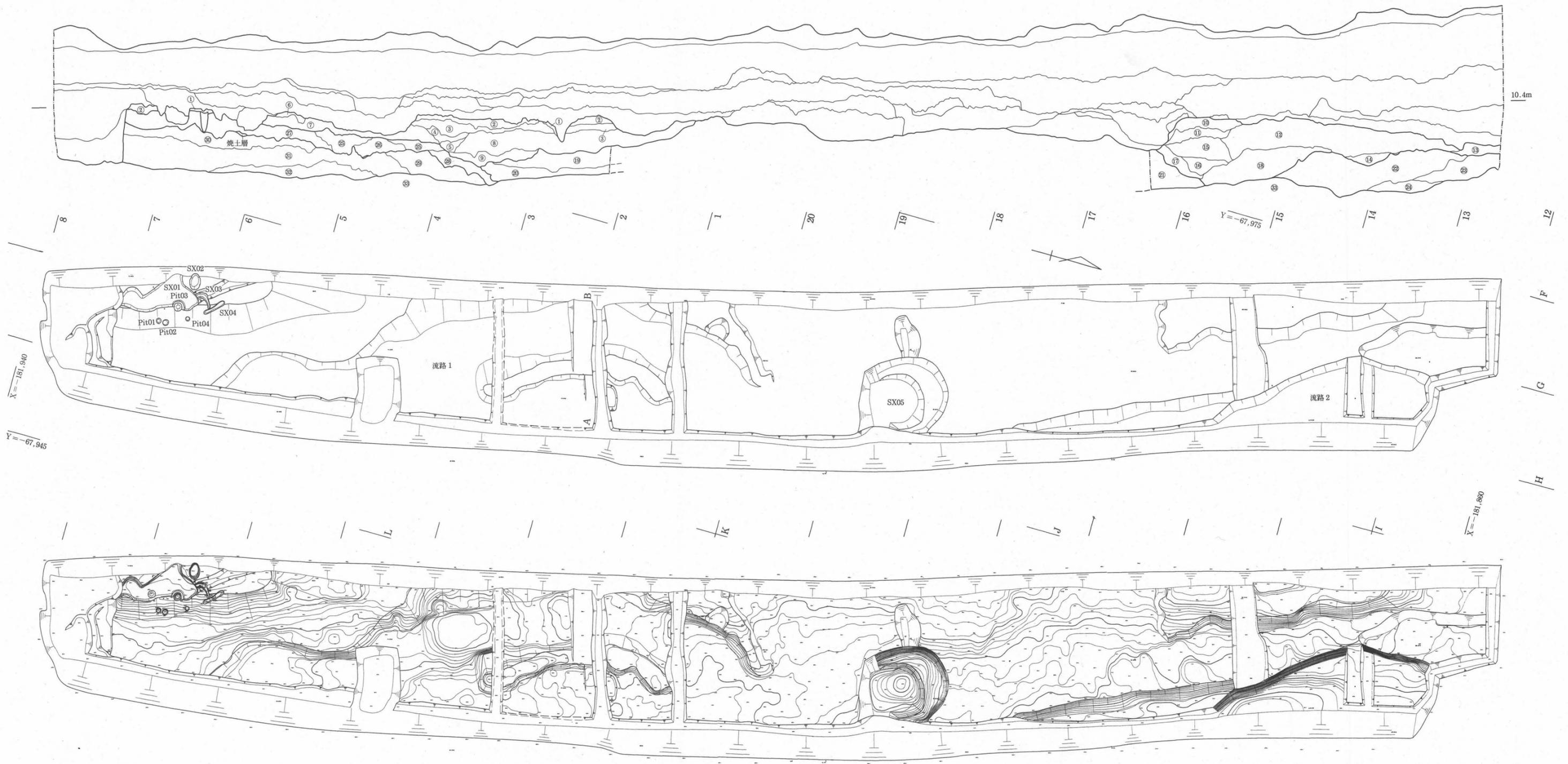
2～8は6層から出土。2～6・8は縄文土器深鉢、7は土錘である。このうち、8は㉑層から出土した。2～6は、丸く収める口縁端部に断面三角形の突帯がつく。2、4は突帯に、3は突帯および口縁端部にそれぞれO字の刻目をもつ。5・6は二条突帯深鉢。断面三角形の突帯をもつが、いずれも摩耗が激しく刻目の有無は不明。7は土錘である。棒状のものに粘土塊を巻き付け、ユビオサエで仕上げる。48.7g。8は縄文土器深鉢である。口径24.2cm。丸くおさめる口縁端部のやや下に、断面かまぼこ形の突帯がつく。刻目はない。器壁の摩耗が激しく調整は不明。胎土は河内。6層出土の遺物は、2～6が滋賀里Ⅳ式の新しい時期、8は長原式か。

航空測量および調査区全景の写真撮影は、5層上面で行ったが、平面的には遺構は認識できなかった。

このため、本報告書では一応自然堆積としておくが、炭化物や焼土の混入や分層した各層の堆積状況と、5層を掘削するとき各層の上面で平面検出を行わなかったことなどから、推定の域をでない。なんらかの遺構の埋土である可能性も想定できる。

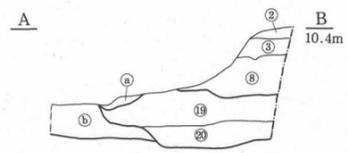


第8図 5・6層出土遺物



- ① 7.5YR2/2黒褐色シルト
- ② 10YR4/2灰黄褐色シルト (粗砂混じり)
- ③ 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
- ④ 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
- ⑤ 10YR4/2灰黄褐色粗砂
- ⑥ 10YR4/2灰黄褐色シルト (2cm程の礫混じり)
- ⑦ 2.5Y5/3黄褐色シルト
- ⑧ 7.5YR4/4褐色シルト (5cm程の礫混入)
- ⑨ 2.5YR4/2灰黄褐色粗砂 (2cm程の礫混入)
- ⑩ 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
- ⑪ 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (2cm程の礫混入)
- ⑫ 2.5Y5/3黄褐色シルト (上面酸化色を呈する)
- ⑬ 2.5Y5/3黄褐色シルト (上面酸化色を呈する)
- ⑭ 10YR6/1灰色細砂
- ⑮ 5Y5/2灰オリーブ色粗砂混じり礫 (2cm程・礫は酸化色を呈する)
- ⑯ 7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂と5Y5/4オリーブ色シルトが互層に堆積 (暗茶褐色の酸化色を呈する箇所あり)
- ⑰ 2.5Y5/3黄褐色シルト
- ⑱ 10Y6/1灰色細砂
- ⑲ 2.5Y6/6明黄褐色シルト (5cm程の礫混入)
- ⑳ 2.5GY5/1オリーブ灰色シルトとN5/1灰色粗砂が互層に堆積 (2cm程の礫混入)
- ㉑ 2.5Y5/2暗灰黄粗砂混じり礫 (5~20cm)
- ㉒ 5Y5/1灰色粗砂混じり礫 (5~10cm)
- ㉓ 2.5GY5/1オリーブ灰色細砂 (炭化物混じり)
- ㉔ 5Y4/2灰オリーブ粗砂とN5/1灰色細砂が互層に堆積 (上面酸化色を呈する)
- ㉕ 2.5Y6/2灰黄色シルト (固まりではない焼土、炭化物を多く含む)
- ㉖ 2.5Y6/2灰黄色シルト (固まりではない焼土、炭化物をかなり多く含む。下層との境目に集中している)
- ㉗ 2.5Y6/2灰黄色シルト (固まりではない焼土、炭化物を少量含む)
- ㉘ 10GY5/1緑灰色シルト
- ㉙ 2.5GY5/1オリーブ灰色細砂
- ㉚ 2.5Y7/6明黄褐色シルト
- ㉛ 2.5Y7/6明黄褐色シルト
- ㉜ 5Y6/1灰色細砂
- ㉝ 5B7/1明青灰色礫
- ㉞ 7.5Y5/2暗灰黄色シルト
- ㉟ 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- ㊱ 調査区東側断面 (第15図) の23層

- 1層 ①
- 2層 ②~④
- 3層 ⑤~⑦
- 4層 ⑧~⑩
- 5層 ⑪~⑬
- 6層 ⑭~⑯
- 7層 ⑰



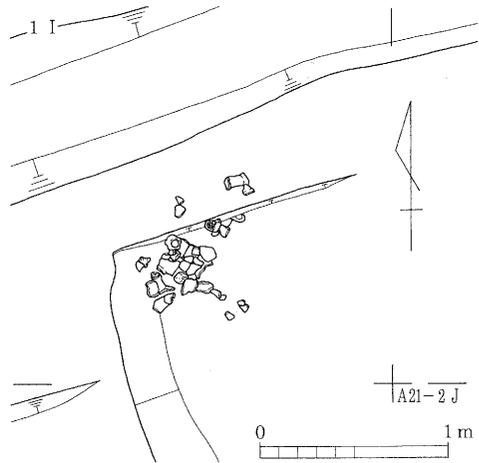
第9図 調査区平面図および断面図

第4章 遺構と遺物

第1節 流路1 (図9・10・11、P.L.9)

A16-19ライン以南で検出した。調査区南端の5層をベースとする箇所から北側へは、3層をベースとする中州状の高まりを挟んで東西に分流し、ふたたび合流したのちに調査区のなかほどA16-20ライン以北は調査区東側へと伸びる。

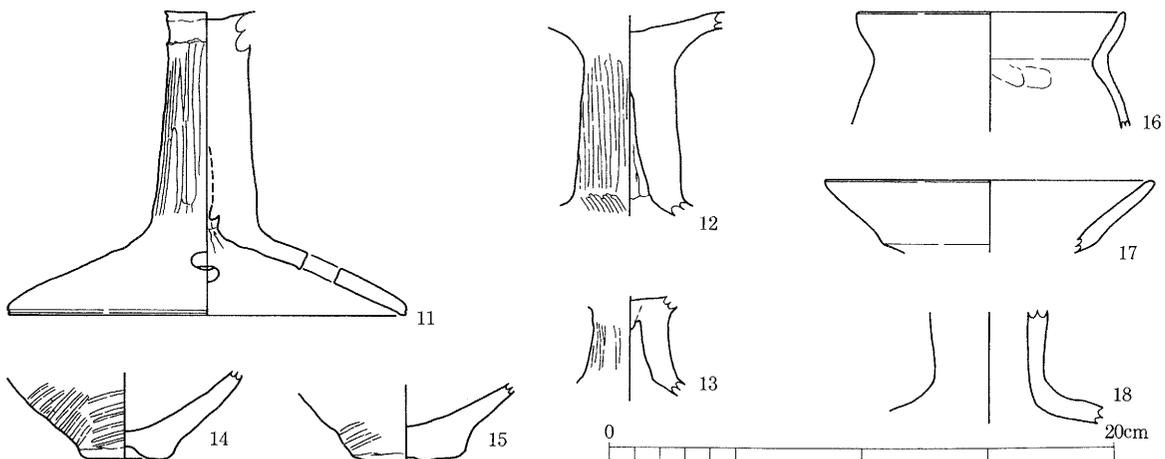
検出したのは、流路1の西岸のみで、調査区東側にひろがる自然流路であろう。調査区断面A-B間は、中州状の高まり付近で設定した断面であるが、図化している断面の直上が堤体盛土と池底のヘドロであることから、流路埋土が削平もしくは浸食を受けているものと考えられる。埋土



第10図 流路1 遺物出土状況

は調査区西側の分流している箇所では褐色系のシルトや礫からなり、中州状の高まりがみられるA21-1J (遺物がまとまって出土した付近) では、シルトであった。

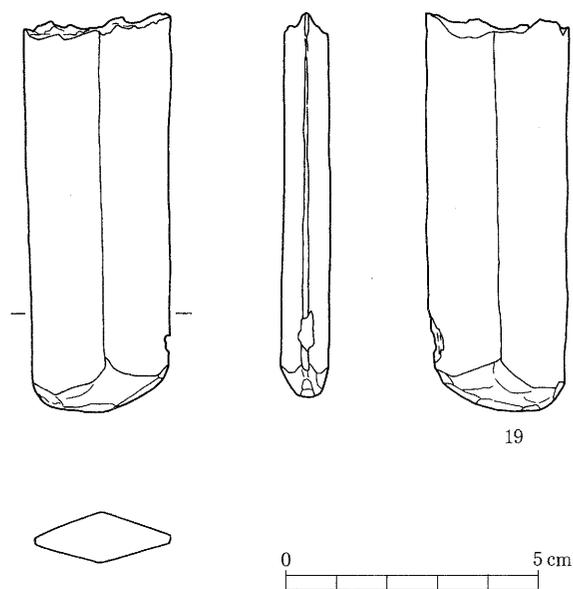
出土した遺物は、弥生土器高坏、甕などである。11~13は高坏脚部である。11は、脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ、脚裾外面は調整不明で内面はナデ、脚柱内面にはシボリ痕がみられる。四方スカシ。杯部との接合痕が明瞭にのこる。脚裾径15.4cm。12は外面は縦方向のヘラミガキで、中空の脚柱部内面にはシボリ痕がみられる。13は外面が縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。中空の脚柱部には円盤充填の痕跡がみられる。14・15は甕底部である。いずれにも底部外面は上げ底状になっている。底径は14が3.5cm、15が4.2cm。16は甕口縁部である。器壁の摩耗が激しく調整はわかりづらい。体部内面にユビオサエがみられる。口径10.4cm。17は鉢の口縁部か。内外面ともナデで仕上げる。口径12.9cm。18は壺頸部。器壁の摩耗が激しく、内外面とも調整は不明。V様式後半から末か。



第11図 流路1 出土遺物

第2節 流路2 (第12~15図、P L.10~12・14)

A16-17ライン以北で検出した。南東から北西方向へ流れる自然流路である。コンテナにして30箱ほどの遺物が出土している。調査区東側断面をみると、池底のヘドロ直下が流路2の埋土であり、A16-20ライン以北では検出面である3層直上が堤体盛土で、検出面のあちこちに凹凸がみられることから、削平を受けていることが考えられる。調査区西側では、地山である7層を、同じく東側では地山直上の3層をベースとしている。埋土は、出土遺物と埋土の状況およびその平面分布から、5層にわけることができる。



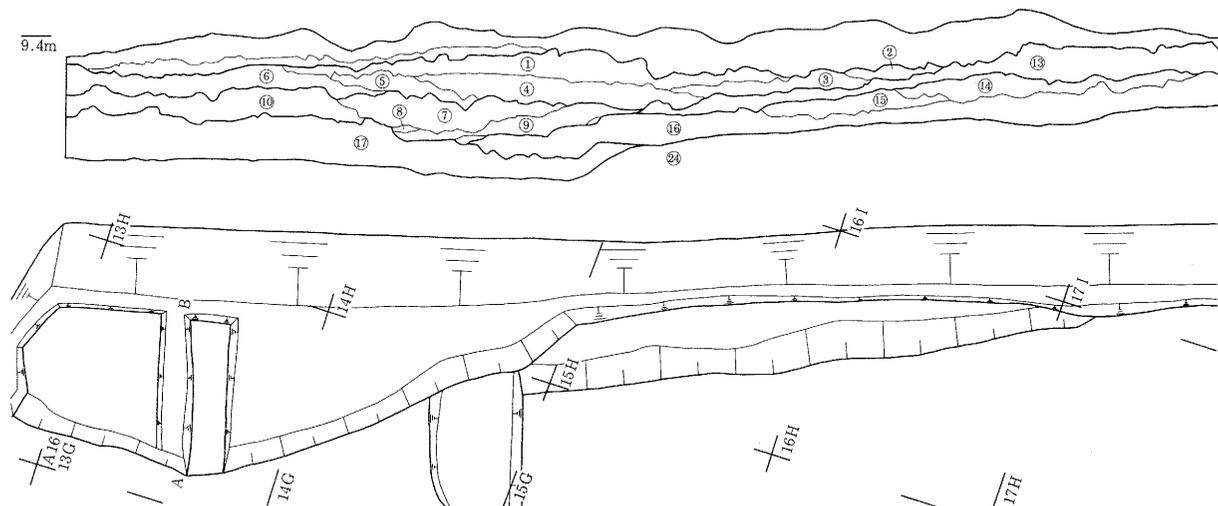
第12図 流路2出土の磨製石剣

流路2-1層 緑灰~灰色シルトで一部にラミナがみられる。A16-16ライン以北に分布する。須恵器および土師器が出土した。

流路2-2層 黒~灰色シルトおよび細砂で一部にラミナがみられる他、2 cm程の礫が混じるものもある。A16-15ライン以北に分布する。須恵器および土師器が出土した。

流路2-3層 黒褐色シルトで、下層との境に2 cm程の礫を含む箇所もみられる。調査区東側断面をみると、A16-15~18ライン付近まで分布するが、15ライン以北は流路2-1・2層にきられている。同様に、この層位の上面をみると凹凸がみられ、池底のため浸食を受けていることがわかる。弥生土器が出土した。

流路2-4層 暗緑灰~灰色のシルトおよび細砂で、一部にブロック状に混じり合うものがみ



第13図 流路2平面図および断面図-1

られる。A16-14~18ライン付近に分布する。遺物は出土していない。

流路2-5層 灰色系の細砂と粗砂が互層に堆積している。A16-15ライン以北に分布し、弥生土器(20)が出土した。IV様式か。

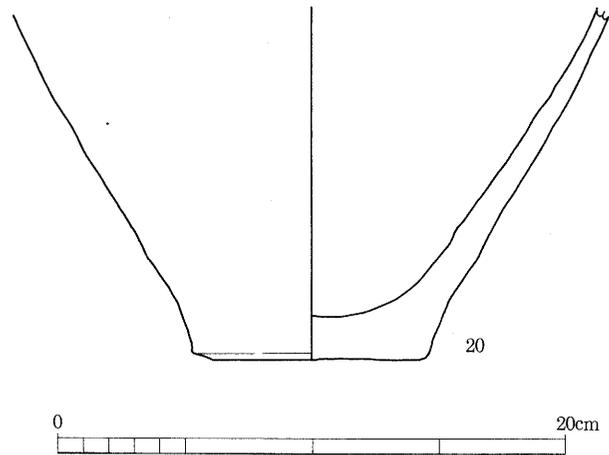
なお、流路2は上記の断面および平面分布から、A16-15ラインを境に、別遺構である可能性も考えられる。平面プランをみると、南東から北西へ直線的に伸びA16-15ライン付近で緩やかに円弧を描くように東へとかた

ちを曲げる。土層断面をみても、前者は流路2-3層、後者は流路2-1・2層と、ほぼ平面プランと対応するように分布し、しかも平面検出時に流路2-1層と流路2-3層に切り合い関係が確認されている。このことから、流路2-3層は、流路2とは別遺構で、直線的にのびる溝の可能性も考えられる。今回は同一の自然流路として報告するが、流路2-3層は別遺構である可能性も指摘しておきたい。

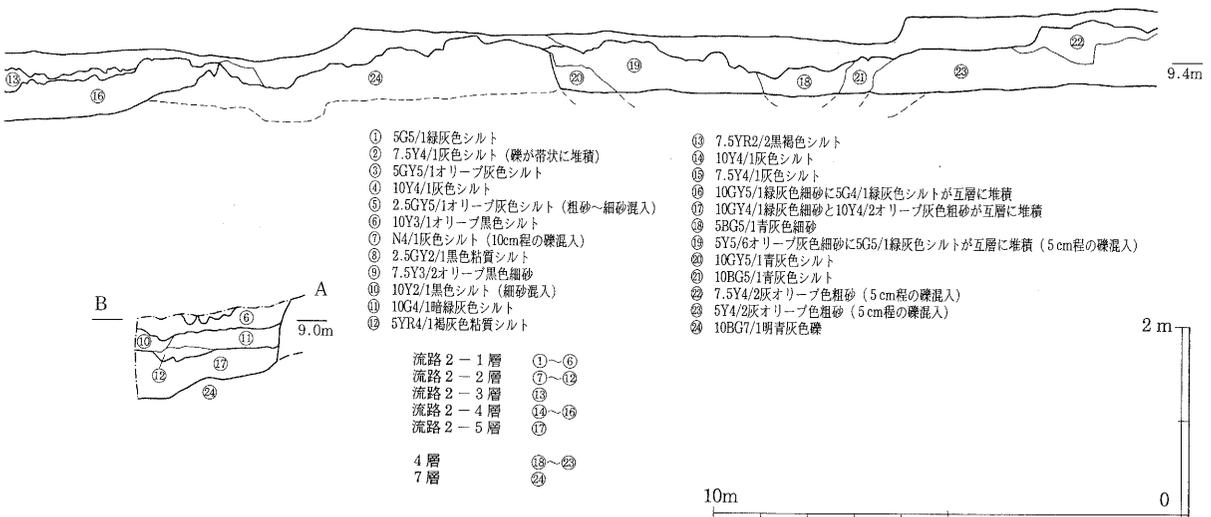
なお、側溝掘削中に、A16-14H付近で磨製石剣(19)が出土した。流路2の埋土のうちいずれの層位に伴うかは確認できなかった。粘板岩製。横方向の研磨により鑄を成形する。側面には縦方向の研磨により1mmほどの面をもつ。幅2.9cm、厚さ9.5mm。

1. 流路2-3層出土の遺物(第16~21図、P.L.11・15~18)

遺構検出時にA16-15~17ラインにかけて平面検出した。また、調査区西側断面(第15図)をみると、対応する層位は平面検出した位置より南側へずれており、調査区外へさらにのびるものと考えられる。遺物はかなり密集して検出され、完形品こそなかったが出土状況から当初相当数が接合するものと考えられたが、整理作業において一団体になるものは数点であったことから、



第14図 流路2-5層出土遺物



第15図 流路2平面図および断面図-2

破損後まとめて廃棄されたものようである。

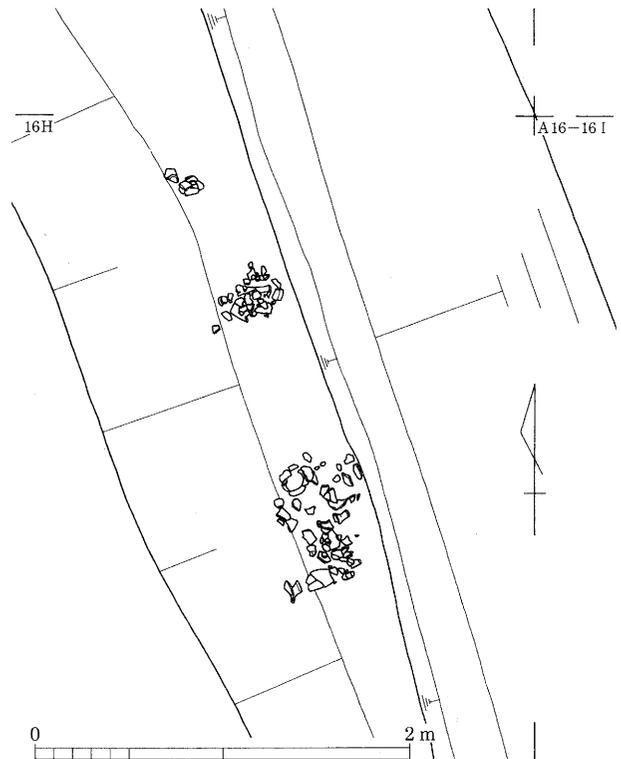
なお、出土した土器は、河内など明らかに搬入品と考えられるものはなく、おそらく在地のものがほとんどである。

21～39は甕である。21～25は口縁部および体部である。器形はおおまかに、胴部に最大径があるもの（21・26・28・29・30・31）と口縁部に最大径があるものにわかれる。

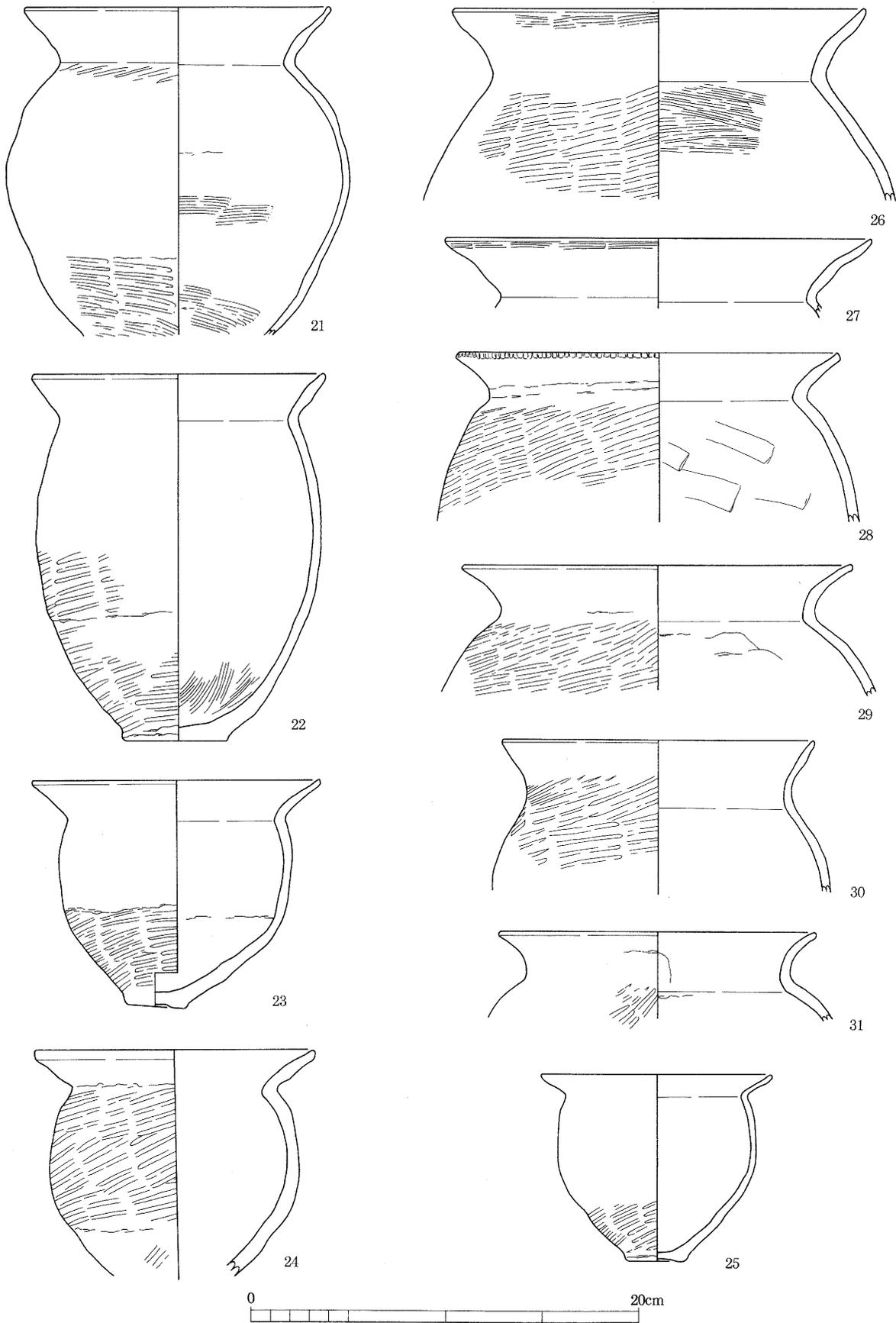
21～23は、口縁部がほぼまっすぐに外反する。体部下半に接合痕がみられ、タタキの単位を違える。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はナデ、底部付近にはハケメがみられるものもある。21は口径16cm、22は口径15.4cm、器高19cm、底径5.5cm。23は口径15cm、器高11.9cm、底径3.2cm。24は、外反する口縁端部外面に面をもつ。体部外面下半に接合痕が

みられ、タタキの単位を違える。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ。口径14.6cm。25は口縁部の上半で屈曲し内傾する口縁をもつ。摩耗が激しく口縁部内外面および体部内面の調整は不明。口径12cm、器高9.8cm、底径3cm。26・27は口縁部の中程で内側へ屈曲する。いずれも口縁部外面に粗いハケメ状の工具痕が横方向にみられる。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は横方向のハケメがみられる。口径は26が21.4cm、27が22.3cm。28は口縁端部外面に面をもち、刻目を施す。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は斜め方向の板状工具によるナデがみられる。口径19cm。29は口縁部中程でさらに外反する口縁をもつ。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面には、横方向の強いナデがみられる。口径20.2cm。30は体部と口縁部の境に屈曲点をもたないもの。口縁部にもタタキがのこる。やや外反させて折り曲げた後、かるくヨコナデを施して、口縁部を仕上げたのであろう。体部内面は摩耗のため調整不明。口径14.2cm。31は口縁部中程でさらに外反する口縁をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ。口径19cm。

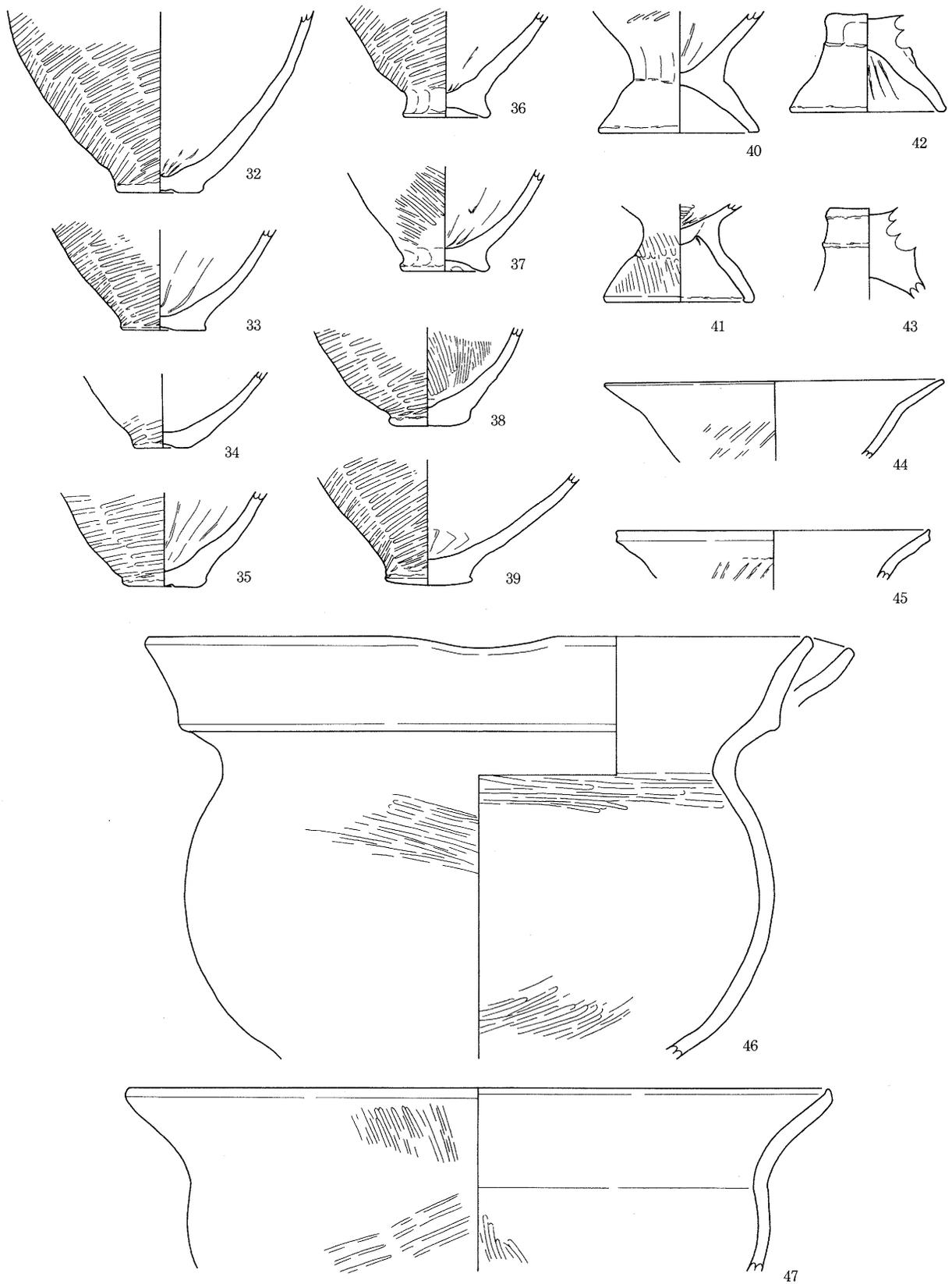
32～39は甕の底部である。32～35は、上げ底状に輪台の痕跡がのこる。内面は、32・33が縦方向の板状工具によるナデ、34がナデ、35が縦方向の強いナデである。底径は32が4.2cm、33が4.3cm、34が2.6cm、35が4cm。36・37は底部をタタキの後、ユビオサエでつまみ出すように仕上げ、上げ底状になっている。いずれも内面を縦方向の板状工具によるナデで仕上げる。底径は、36が4.2cm、37が4.6cm。38・39は平坦な底部をもつもの。内面は38がハケメ、39が横方向の板状工具によるナデののち一部ナデで仕上げる。底径は38が4.1cm、39が4.5cm。なお、32～34、38・39には底部外面に木葉痕がのこる。流路2－3層から出土した甕の特徴として、口径は12cm前後、15



第16図 流路2－3層遺物出土状況



第17図 流路2-3層出土遺物-1



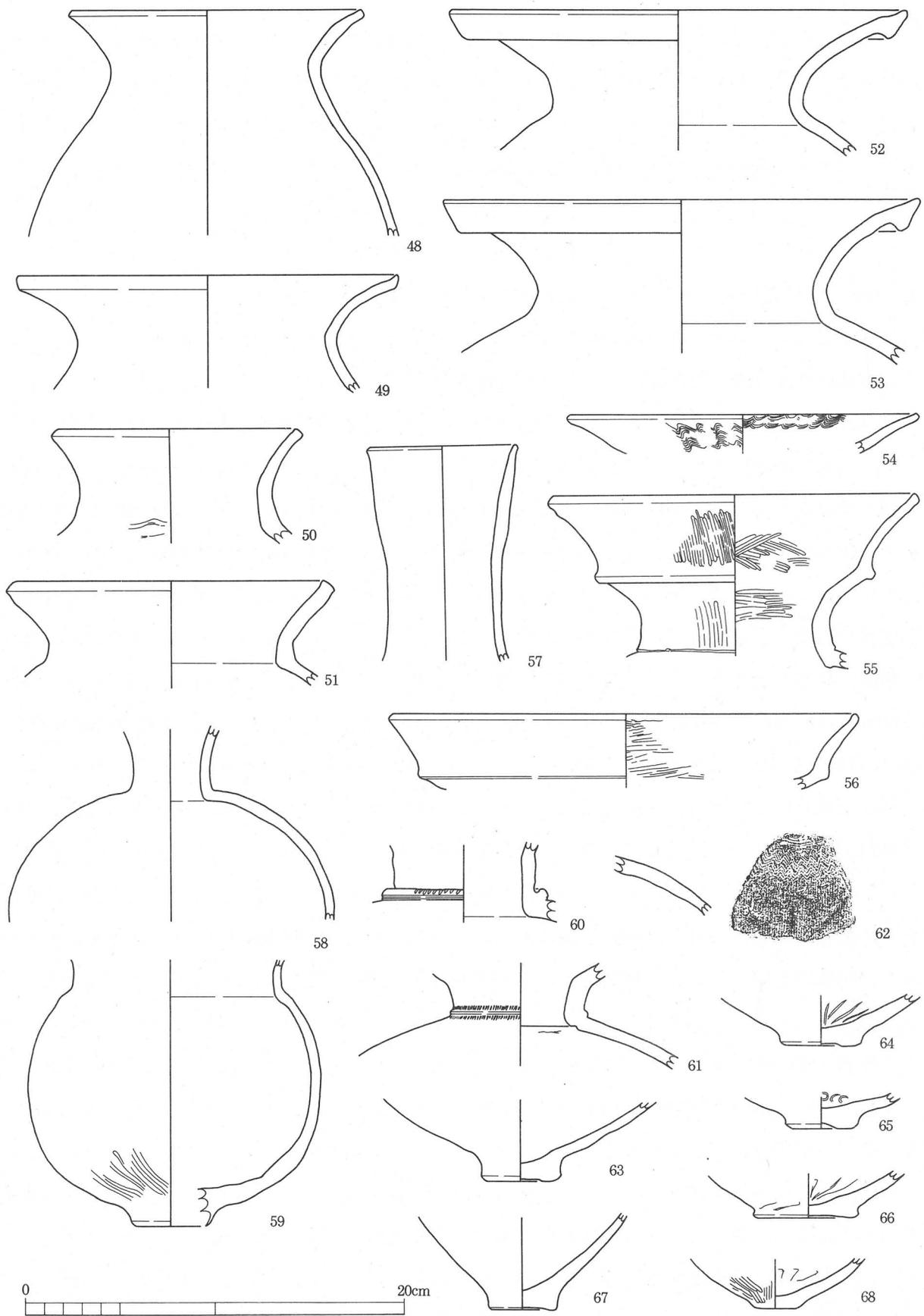
第18図 流路2-3層出土遺物-2

cm前後、20cm前後の3グループに、底径は2cm前後、4cm前後の2グループにそれぞれわかれることが指摘できる。

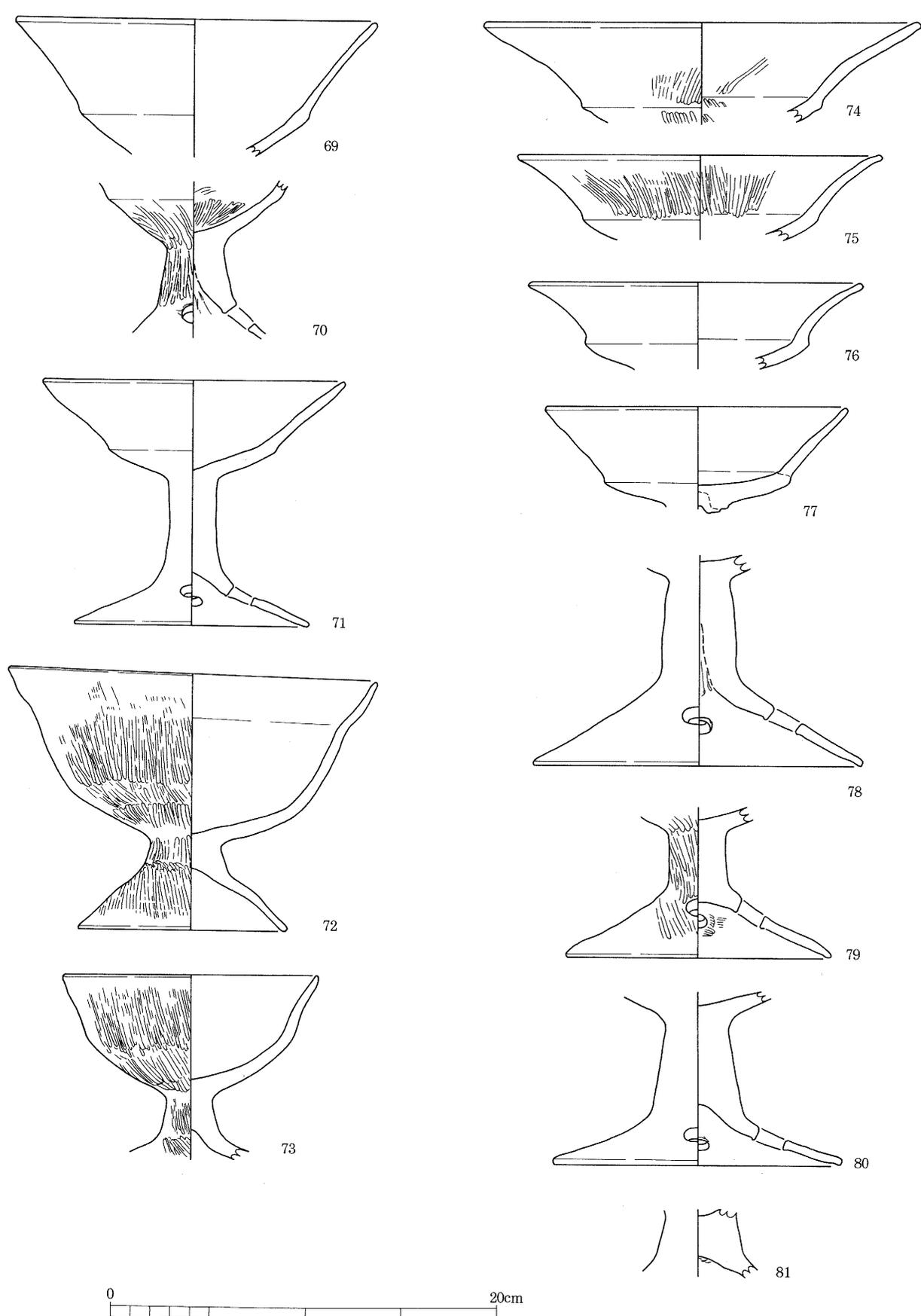
40～43は台付の甕もしくは壺、鉢の底部である。40は鉢であろうか。体部外面にタタキがみられ、体部と脚部の接合部分は縦方向の板状工具によるナデ、脚部内外面はナデで仕上げる。41は壺であろうか。脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部内面はハケメで仕上げる。脚部内面をみると円形の突起がみられ、円盤充填の痕跡と考えられる。42・43は鉢であろうか。体部と脚部の接合部分で剝離しており、接合方法がよくわかる。内外面ともナデで仕上げる。

44～47は鉢である。44は外反する口縁部をもつ。口縁部内外面および体部内面は摩耗のため調整不明。口径17.6cm。45は外反する口縁部の外面に面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデで仕上げる。口径16cm。46は受け口状の口縁部の一カ所を片口状に外側へおりまげている。体部内外面は斜め方向のヘラミガキ、口縁部内外面は丁寧なヨコナデで仕上げる。口径34cm。47は外反する口縁部の外面に面をもつ。体部外面はナデで仕上げるが一部に成型時のタタキがのこる。内面は縦方向のヘラミガキ、口縁部内面はナデ、外面はヘラミガキで仕上げる。口径36cm。

48～68は壺である。48～50は外反する口縁部の端部に弱い面をもつ。50が口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に板状工具によるナデがみられる他は、いずれも摩耗のため調整は不明。口径は48が15.4cm、49が20cm、50が13.2cm。51は外反する口縁部の端部に極弱い面をもち、体部と頸部の境目に屈曲点がみられる。内外面ともナデで仕上げる。口径17.2cm。52・53は外反する口縁部に断面三角形の面をもつ。いずれも摩耗が激しく調整は不明。口径は52が24cm、53が25cm。54は外反する口縁部の内外面に、クシ描きの波状文がめぐり、口径18.4cm。55・56は複合口縁をもつ。55は口縁部および頸部外面に縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキがみられる。頸部と体部の境目には体部方向へ板状工具による強い圧痕がみられ、段状になる。口径19.4cm。56は口径24.6cmと壺にしては大きく、鉢の可能性もある。外面は丁寧なヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。57は直立する頸部が口縁部まで続くもの。外面は丁寧なナデ、内面は摩耗のため調整は不明。口径11.2cm。下端は外反していることから、頸部と体部の境目付近と考えられる。58は57と同じタイプの頸部および体部であろう。摩耗が激しく調整は不明。59は、甕のような器形ではあるが、体部外面に縦方向のヘラミガキがみられる。底部外面はユビオサエで仕上げ、体部外面の最大径のやや下に煤が付着している。60は頸部と体部の境目に粘土帯を貼りつけ、ヘラ状工具による刻目を施す。粘土帯は上下から棒状工具によるものか丁寧にナデつけられている。頸部内外面は丁寧なナデで仕上げる他は、摩耗のため調整不明。61は頸部と体部の境目にみられる断面三角形の突帯の上下に、ヘラ状工具による刺突文をもつ。内外面とも摩耗のため調整不明。62は壺の体部である。クシ描きの直線文および波状文がめぐり、縦方向のヘラミガキがみられる。63～68は壺の底部である。63～65は輪台がみられ上げ底状になる。63は摩耗が激しく方向は不明だが、外面にヘラミガキの痕跡がのこる。底径4.2cm。64は外面に摩耗のため方向は不明だがヘラミガキの痕跡がのこり、内面には縦方向の板状工具による圧痕がみられる。底径4.2



第19図 流路2-3層出土遺物-3

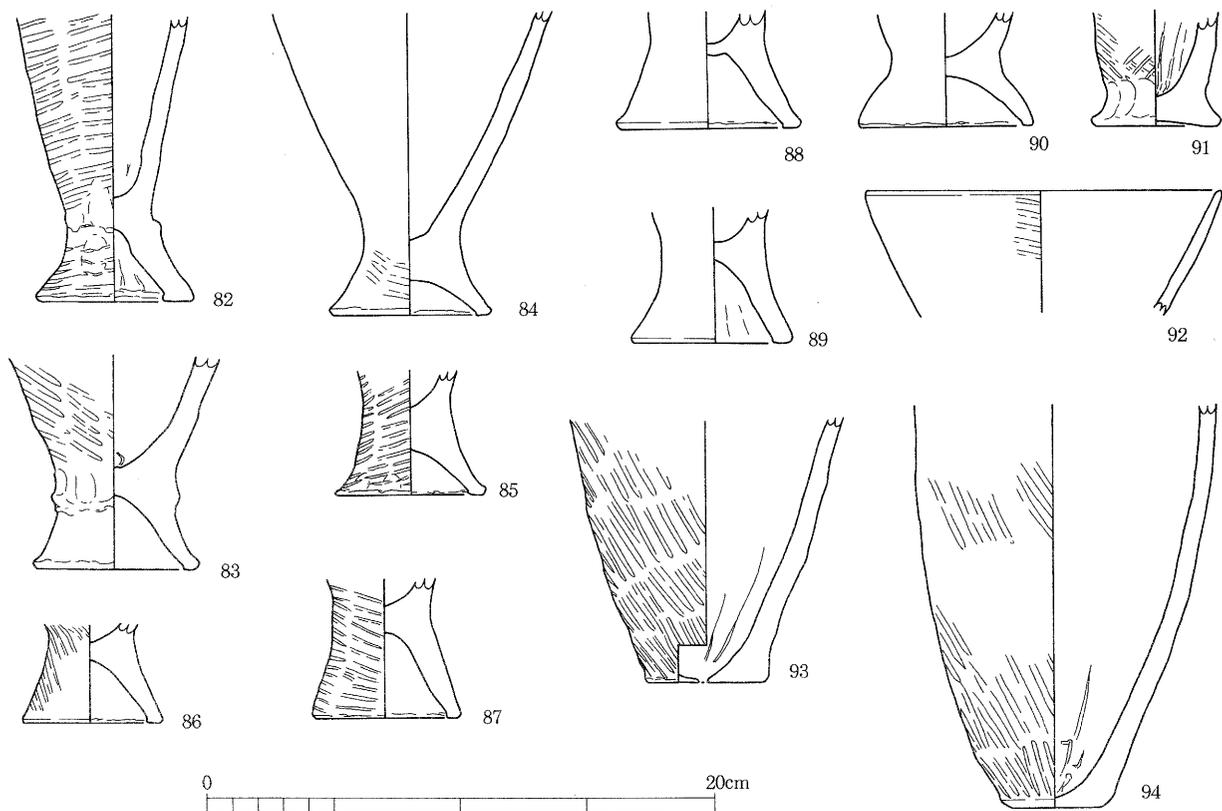


第20図 流路2-3層出土遺物-4

cm。65は外面はナデ、内面にはナデで仕上げた後、半裁竹管文を施す。底径3.8cm。66・67はやや上げ底状の底部をもつ。66は外面はナデで一部板状工具による圧痕がみられ、内面には縦方向の板状工具によるナデを施す。底径5.5cm。67は摩耗のため内外面とも調整不明。底径3.6cm。68は、平坦な底部をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は板状工具による横方向のナデがみられる。底径2.4cm。

69～81は高坏である。69～71は杯部に稜線をもつものであるが、杯部の立ち上がりと稜線の位置を相対的に比べると、立ち上がりがきつく稜線が上方に位置する69・70と、立ち上がりがよわく稜線が下方に位置する71にわけることができる。69は摩耗が激しく内外面とも調整不明。杯部口径19cm、稜線での径11.8cm。70は内外面とも縦方向のヘラミガキで、脚柱部内面にはシボリ痕がのこる。三方スカシ。71は摩耗のため内外面の調整は不明。四方スカシ。杯部口径15.6cm、稜線での径9.1cm。72は碗形の杯部から湾曲し外反する口縁部をもつ。外面は縦方向のヘラケズリ、脚部内面はナデ、杯部内面は摩耗のため調整不明。73は碗形の杯部をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、口縁端部内外面はヨコナデ、杯部内面はナデ、脚裾内面には板状工具によるナデがのこる。スカシの有無は不明。口径13.2cm。74～77は杯部に稜線をもつ。74・75は内外面ともヘラミガキがみられるが、その他は摩耗のため調整不明。74は杯部口径22.5cm、稜線での径12.6cm、75は杯部口径17.1cm、稜線での径10.2cm、76は杯部口径17.6cm、稜線での径9.8cm、77は杯部口径16cm、稜線での径9.6cm。78～81は脚部である。78は外面は摩耗のため調整不明。脚柱部内面にシボリ痕がのこる。四方スカシ。脚裾径17.2cm。79は外面が縦方向のヘラミガキ、脚裾部内面が横方向のハケメの他一部ナデがみられ、脚裾端部はヨコナデで仕上げる。四方スカシ。脚裾径13.9cm。80は摩耗のため内外面とも調整不明。四方スカシ。脚裾径13.2cm。81は内外面とも丁寧なナデ。72と同じタイプか。

82～92は製塩土器である。器形、成形方法の特徴から4タイプにわかれる。82・83は脚部と体部の接合痕が明瞭で、それぞれ別段階で仕上げている。82は脚部と体部いずれにもタタキを施し、その接合部分にはユビオサエがのこる。体部内面は縦方向の強いナデ、脚部内面はナデで仕上げる。脚部径6.4cm。83は脚部はユビオサエで仕上げ、体部にはタタキがみられる。体部と脚部の接合部分にはユビオサエがのこる。脚部および体部内面は粗いナデで仕上げる。脚部径6.6cm。84・85は脚部と体部の成形単位は異なるが、脚部および体部を一度にタタキしめていることから成形の最終段階で同時に仕上げを行っていると考えられる。いずれも体部および脚部内面はナデで仕上げる。このうち、84は外面に被熱痕がみられる。86～89は体部および脚部を同時に仕上げたもので、体部底面の器壁が薄く筒状の脚部に粘土塊を充填したかのようなものがあるなど簡素化した作りのもの。87は脚部および体部内面はナデ。脚部径5.9cm。88は内外面とも丁寧なナデで仕上げ、外面に被熱痕がみられる。脚部径7.2cm。89は、体部内外面は丁寧なナデ、脚部内面は縦方向の強いナデで仕上げ、外面に被熱痕がみられる。脚部径6.3cm。90は内湾する脚部で、外面はナデで仕上げるが一部にタタキがのこる。脚部径7cm。91は、体部成形後に脚部をつ



第21図 流路2-3層出土遺物-5

まみ出して成形する。体部内面には縦方向の強いナデ、外面のタタキは2方向みられる。脚部径5cm。92は口縁部で、外面に被熱痕がみられる。器壁が剥離しており調整は不明。口径17cm。

93・94は真蛤壺である。93は平底の底部に焼成後に施した穿孔がみられる。内面は縦方向の板状工具によるナデで仕上げる。底径4.7cm。94は内面は全体にナデで、特に底部付近を縦方向の強いナデで仕上げる。底部の穿孔はない。底径3.4cm。

以上、流路2-3層から出土した土器は、壺や製塩土器で若干新旧の遺物を含むが、おおむねV様式末と考えてよからう。

2. 流路2-2層の出土遺物 (第22・23図、P.L.12・19)

平面的には、A16-15ライン以北に均一に分布し、シルト質であることから緩やかなよどみ状であったと考えられる。須恵器および土師器が出土しており、完形品が多い。

須恵器杯・高坏・壺・平瓶・甗・横瓶・甕・飯蛤壺、土師器甕・皿・鉢が出土している。

95~109は須恵器である。95~98、101は杯蓋である。いずれも天井部に回転ヘラケズリがみられる。95は口径13.5cm、器高4cm。96は口径13.3cm、器高4.6cm。97は内面に自然釉が付着。口径12.6cm、器高3.7cm。98は天井部にヘラ記号がみられる。口径12.8cm、器高3.4cm。99・100は杯身である。いずれも底部にヘラケズリがみられる。99は口径12.2cm、器高4.2cm。100は口径10.2cm、器高3.3cm。101は杯蓋である。天井部に回転ヘラケズリがみられる。口径17.3cm。102は、杯蓋か。回転ヘラケズリを施す天井部に、つまみがつく。口径6cm、器高3.3cm。103は高坏

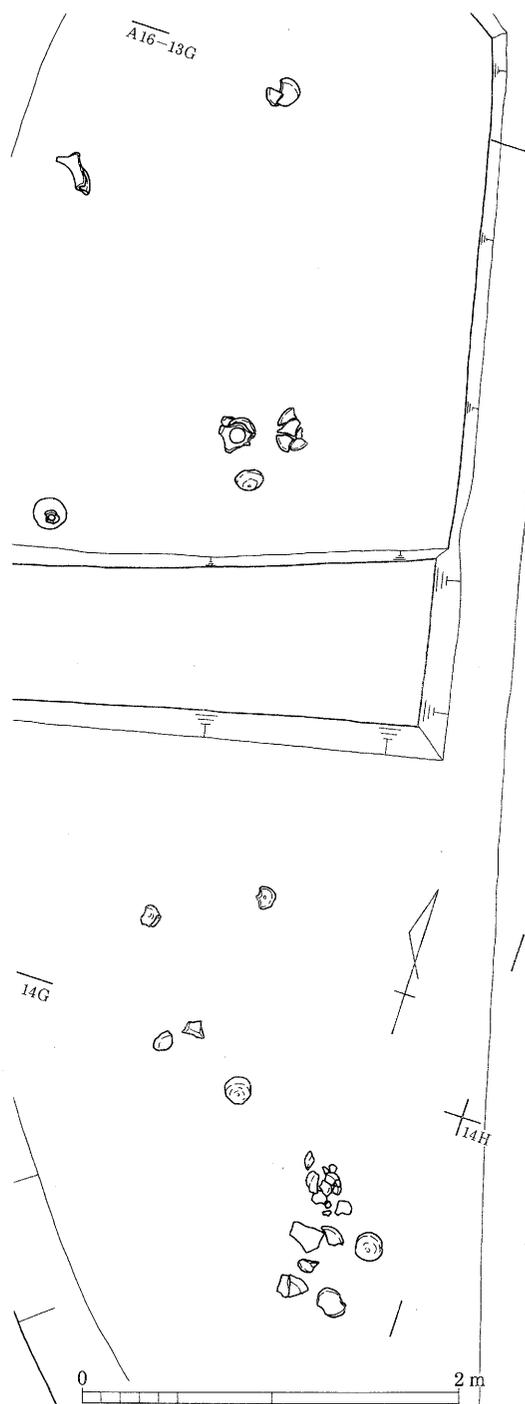
脚部である。無蓋のものか。脚裾径11.4cm。104は壺である。体部下半には回転ヘラケズリを施す。口径8cm、器高5.1cm。105は平瓶である。頸部には、沈線がめぐり、底部には回転ヘラケズリを施す。106は甕である。頸部に2条、頸部と体部の境目に1条の沈線がめぐり、底部には回転ヘラケズリを施す。107は横瓶である。体部外面はタタキのち縦方向のカキメを施し、内面には同心円文がのこる。頸部にはヘラ記号がみられる。体部外面に自然釉が付着する。口径10.8cm。108・109は甕である。いずれも体部外面はタタキのちカキメ、内面には同心円文がのこる。108は口縁端部にクシ状工具による列点文のような刺突を施す。口径21.8cm。109は口径18.4cm。

111～114は土師器である。111・112は甕である。111は口縁端部に面をもつ。口縁外面はヨコナデ、内面は横方向のハケメ、体部内外面は横方向のハケメで仕上げる。口径14.4cm。112は口縁端部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコナデで内面はハケメ、体部外面は縦方向のハケメで内面は斜め方向の板状工具によるナデで仕上げる。口径15.6cm。113は皿である。口縁端部は内面に肥厚し丸くおさめる。内外面ともヨコナデで仕上げる。口径22.7cm、器高2.2cm。114は鉢である。外面に横方向のヘラミガキがみられる他は、摩耗が激しく調整は不明。口径16.1cm。

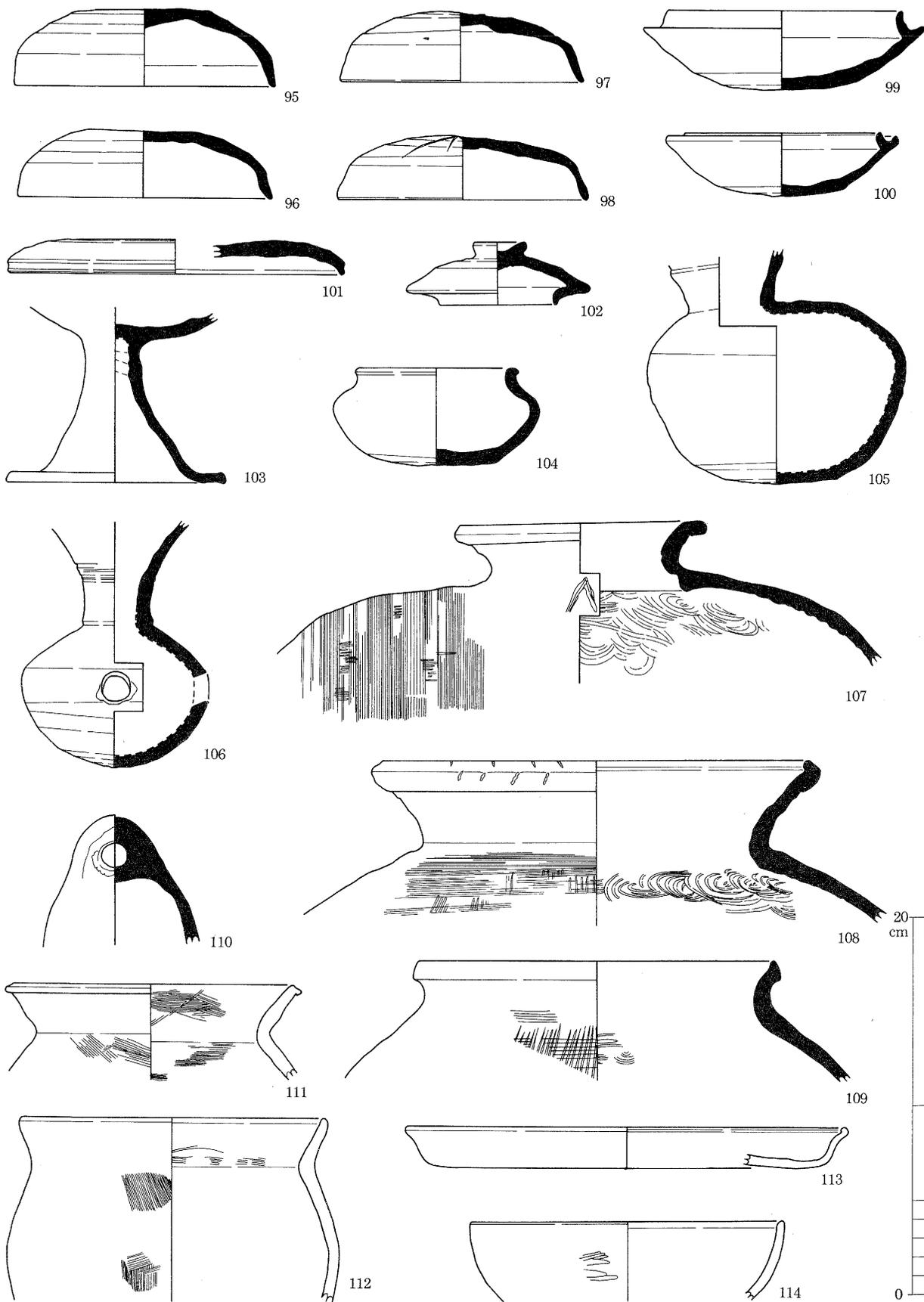
3. 流路2-1層の出土遺物(第24図)

A16-16ライン以北に均一に分布する。なお、調査区および遺構断面をみると上面に凹凸がみられる。直上の0層は青灰色粘土で、シルトおよび砂質の流路埋土とは明確に区分できる。この青灰色粘土はおそらく下池への吐水口を意識して敷きつめられたものと考えられ、このことから流路2-1層は直上の池底のヘドロ層の浸食により影響を受けていることがわかる。須恵器および土師器が出土しており、完形品が多い。

須恵器杯・蓋・壺・甕、土師器鉢・皿・高坏・甕・釣鐘形真蛸壺の他に、図示はしていないが製塩土器の細片も3点みられる。器壁が3～5mm程度で、内外面ともユビオサエで仕上げる。96



第22図 流路2-2層遺物出土状況



第23図 流路2-2層出土遺物

年度の調査で出土した完形品と同じタイプのものである^①。

115～125は須恵器である。115～117は杯蓋である。いずれも天井部に回転ヘラケズリがみられる。115は口径11.6cm、器高3.6cm。116は口径13cm、器高3.9cm。117は口径11.2cm、器高3.7cm。118～120は杯身である。いずれも底部に回転ヘラケズリがみられる。118は口径11.6cm、器高3cm。119は底部にヘラ記号がみられる。口径12cm、器高3.5cm。120は口径12.2cm、器高3.7cm。121は杯である。口径16.6cm、器高4.2cm。122は杯である。底部に回転ヘラケズリがみられる。口径13.3cm、器高2.7cm。123は壺である。底部に回転ヘラケズリがみられる。体部最大径14.1cm。124・125は甕である。124は口径23.4cm。125は口径9.6cm。

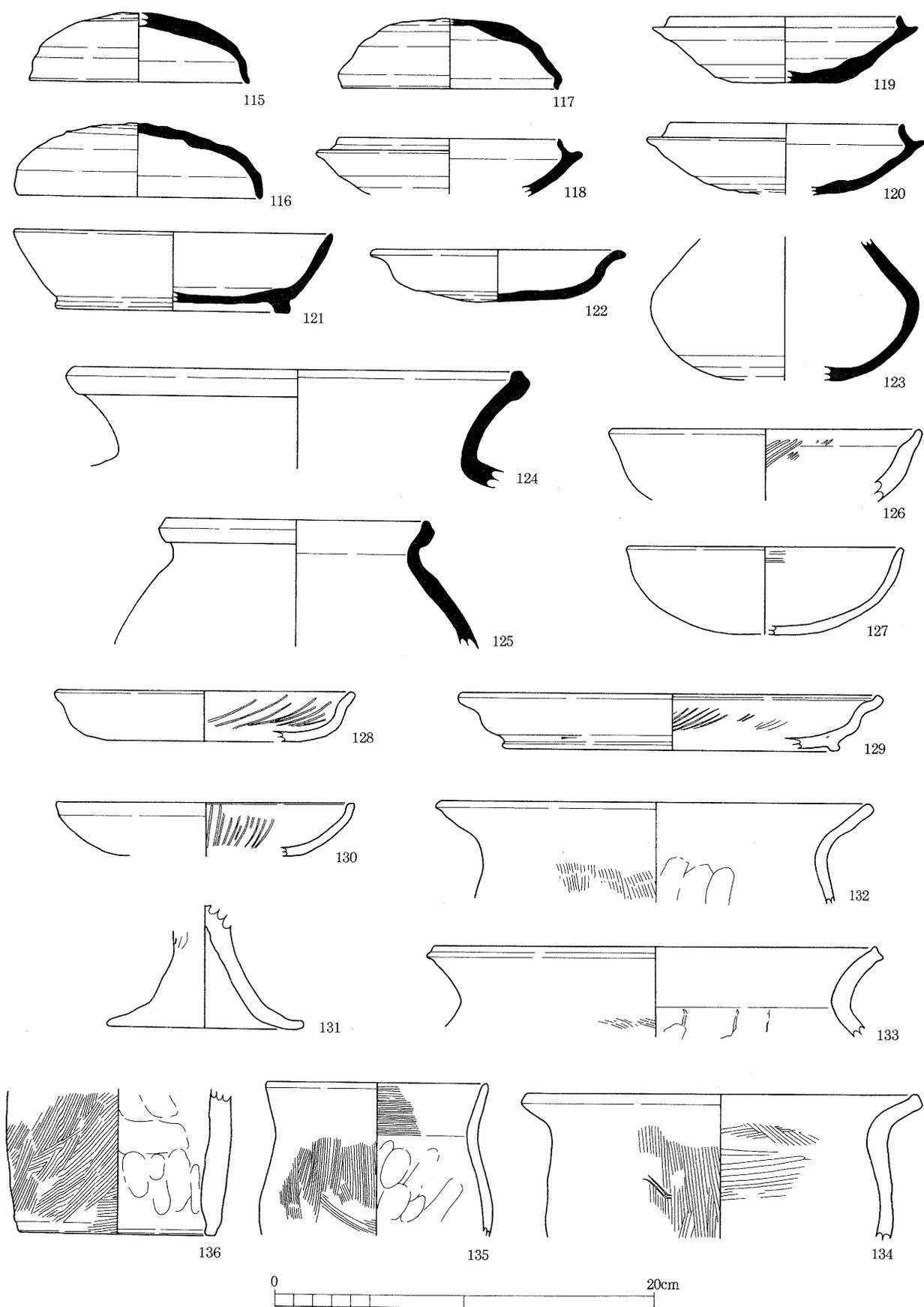
126～136は土師器である。126・127は鉢である。126は口縁部内外面はヨコナデ、内面に斜め方向のヘラミガキがみられる他は、摩耗のため調整不明。口径16.2cm。127は口縁部内外面はヨコナデ、口縁部付近の内面に横方向のヘラミガキがみられる他は、摩耗のため調整不明。口径14cm。128・129は皿である。128は外面下半はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、内面は斜め方向のヘラミガキがみられる。口径15.2cm、器高2.7cm。129は口縁部が屈曲し内面に肥厚する口縁端部をもつ。外面下半はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、内面には斜め方向のヘラミガキがみられる。口径21.8cm、器高3cm。130は杯もしくは高杯の杯部である。口縁部内外面はヨコナデ、内面にはヘラミガキがみられる他は、摩耗のため調整不明。口径15.4cm。131は高杯である。脚柱部上端には成形時のシボリ痕がわずかにのこる。内外面ともナデで仕上げる。脚裾径9.7cm。132～135は甕である。132は体部外面はハケメ、内面は縦方向のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。口径22.4cm。133は体部外面はハケメ、内面は横方向のピッチの短いヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げ、口縁部内面に横方向のハケメがわずかにのこる。口径23.1cm。134は体部外面はハケメ、内面は横方向のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げ、口縁部内面にはわずかに横方向のハケメがのこる。口径20cm。135は体部外面はハケメ、内面にはナデで仕上げるが指頭痕がのこる。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメで仕上げる。口径11.5cm。136は土師質の釣鐘形真蛸壺である。内面はナデで仕上げるが指頭痕がのこる。外面はハケメ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。口径9.4cm。

流路2-2層および1層は、須恵器杯、土師器杯で新しいものがみられるが、おおむね7世紀半頃～後半頃に位置づけられよう。

第3節 5層上面の遺構（第25・26図、P.L.13）

A21-6ライン以南の5層上面でピット、土坑を検出した。検出面のレベルは標高10m前後。遺構面直上の包含層は一部しかのこっておらず、堤体構築による削平を受けていると想定される。遺構面は東側へ傾斜する斜面であるが、上記のことから旧地形そのものではないと考えられ、検出した各遺構は本来の深さおよび形状を保つものではないといえる。

1. Pit 01～04 いずれも直径20cm、深さ10cmほどで、柱痕は確認されていない。埋土はP i



第24図 流路2-1層出土遺物

t 03が灰褐色シルトである他は、黒褐色シルトである。調査区内では掘立柱建物を構成するとは認識できなかった。ただ、検出面が削平されており、遺構が密集していることを考え合わせると、掘立柱建物が存在した可能性も考えられる。つまり、P i t 01とP i t 04が同一の埋土で間隔が2m程であることから、本来南東側にもうひとつ対応するピットがあり、西側へのびるピットはほぼ同一の埋土のS X 01に重複していたため検出できなかったと仮定すれば、掘立柱建物を構成するピットとも考えられる。

遺物はP i t 03から土錘（142）が出土している。棒状の両端に紐孔をもつ。14.2g

2. S X 01~04 平面プランが不定形および溝状のもので、不明土坑として取り扱った。埋土はS X 03が褐灰色シルトで、それ以外は黒褐色シルトである。

遺物はS X 01から須恵器杯・蓋、土師器鉢・甕が出土している。137は蓋である。天井部に回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号がみられる。口径10.8cm。138は杯である。底部に回転ヘラケズリがみられる。口径9.6cm、器高3.2cm。139・140は土師器鉢である。139は摩耗のため内外面とも調整不明。口径14.4cm。140は口縁部内外面にヨコナデがみられる他は、摩耗のため調整不明。口径13.6cm。141は土師器甕である。内外面ともヨコナデで仕上げる。口径23.7cm。

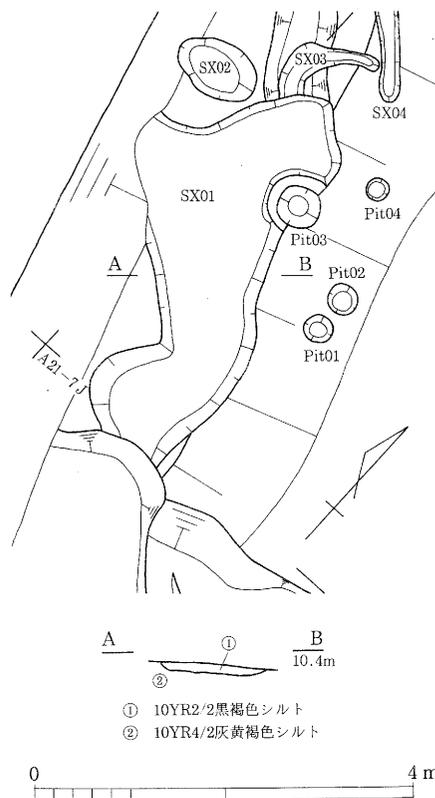
土師器甕がやや新しいものではあるが、その他はおおむね7世紀半頃か。

なお、5層上面で検出した遺構は、切り合い関係から以下のように推移がたどれる。

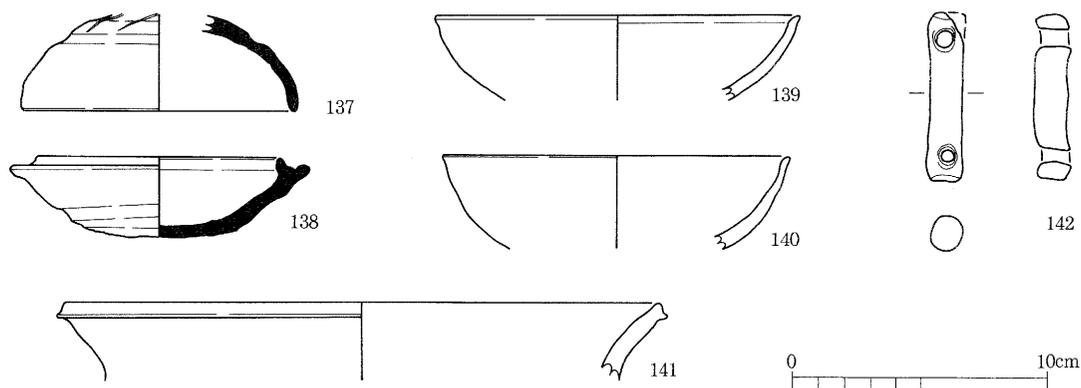
S X 03→P i t 01・02・04、S X 01・02・04（7世紀後半頃）→P i t 03

また、可能性としては、以下のような推移が想定できる。

S X 03→P i t 01・02・04（掘立柱建物）→S X 01・02・04（7世紀後半頃）→P i t 03



第25図 S X 01~04・
P i t 01~04平・断面図



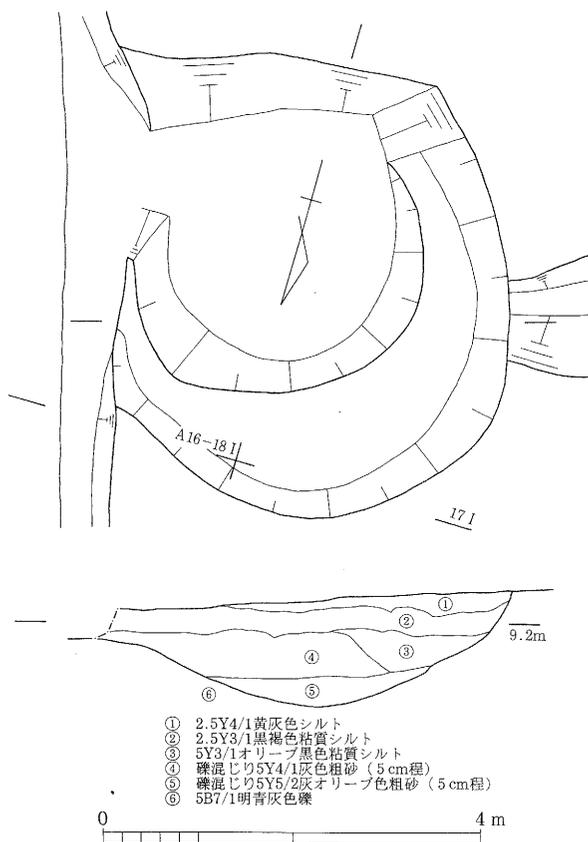
第26図 S X 01・P i t 03出土遺物

第4節 3層上面の遺構（第27・28図、P L.13・19）

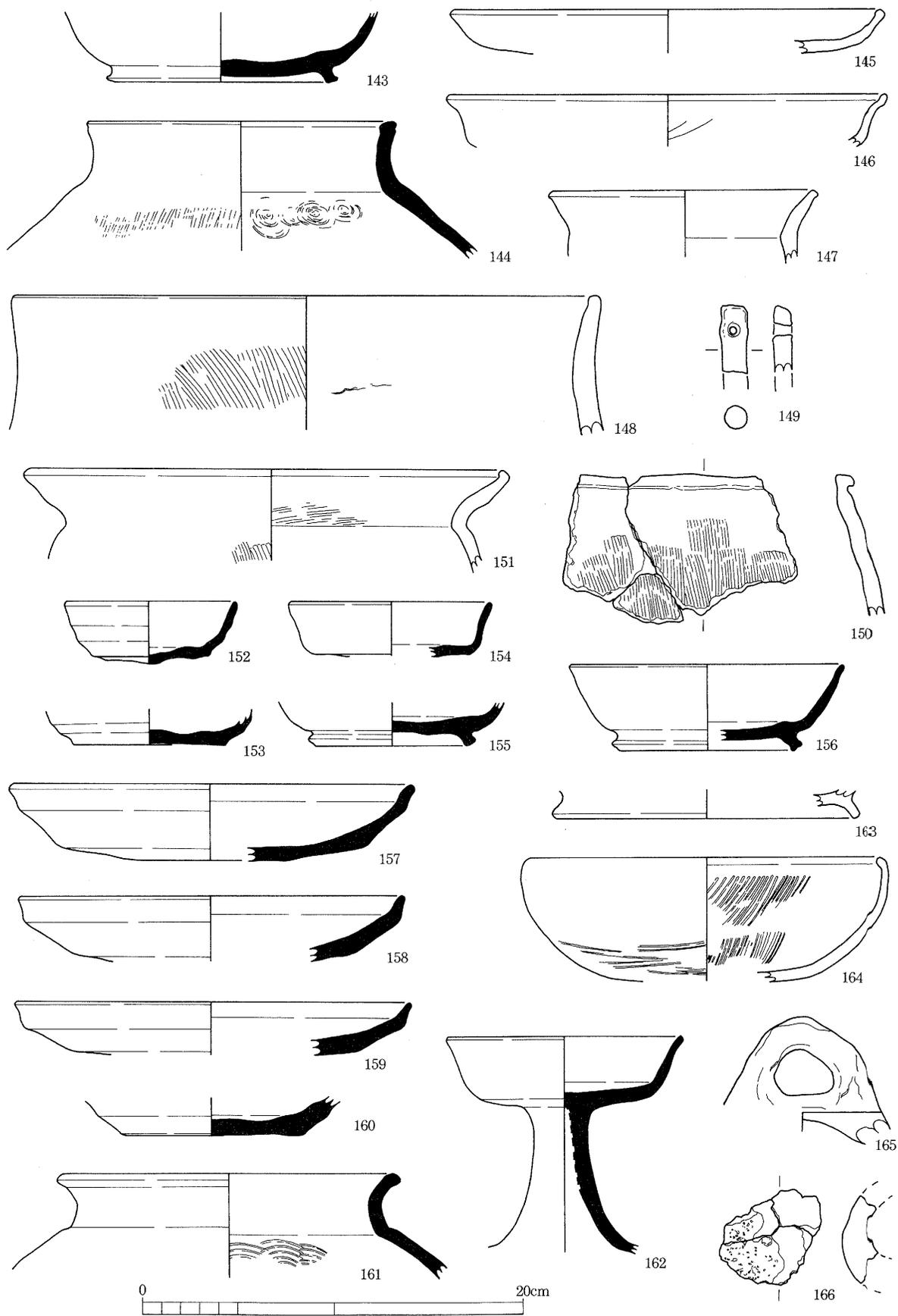
1. S X 05 調査区のほぼ中央、A16-17~18ラインの間で検出した。遺構南半は試掘トレンチによりプランは消失しており、検出面の直上が堤体盛土および池底のヘドロであったため、本来の形態をとどめていない。規模は径約4.5mで、緩やかな段をもつ。埋土は、シルト質のものゝ粗砂・礫のものにわけることができる。前者を1層、後者を2層として遺物の取り上げを行った。遺構の性格は不明。ただ、ベースである礫層の掘削はかなりの労力を要する。何か特別な意味合いのものであったのかも知れない。

遺物はそのほとんどが1層から出土した。図示しているのはすべて1層出土の遺物である。須恵器杯・蓋・甕・高坏、土師器皿・鉢・釣鐘形真蛸壺、土錘、移動式竈、フィゴ羽口が出土した。

143は須恵器杯である。底径12cm。144は須恵器壺である。体部外面はタタキのちナデ、内面には同心円文がのこる。口縁部内外面は回転ナデ。口径15.8cm。145・146は土師器皿である。いずれも内外面はヨコナデで仕上げる。146は斜め方向のヘラミガキを施す。145は口径22cm、器高2.3cm。146は口径22.6cm。147は土師器甕である。口縁部内外面をヨコナデで仕上げる他は摩耗のため調整不明。口径13.4cm。148は移動式竈であろうか。口縁端部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面は粗いナデで接合痕がのこる。口径30cm。149は土師質土錘である。棒状のものゝの両端に紐孔をもつものゝと考えられる。150は移動式竈である。体部外面はハケメ、内面は粗いナデで仕上げる。151は土師器甕である。体部外面はハケメ、内面は弱いヘラケズリを施す。口縁部内外面はヨコナデで仕上げるが、内面には横方向のハケメがのこる。口径24.8cm。152~160は須恵器杯である。152~154はいずれも底部にヘラ切り痕がのこる。152は口径9cm、器高3.3cm。154は口径10.7cm、器高2.8cm。155は高台内側にヘラ切り痕がのこる。底径8.8cm。156は高台内側にヘラ切り痕がのこる。口径14.4cm、器高4.5cm。157~160は底部内外面はナデ、口縁部内外面は回転ナデで仕上げる。口径20cm前後で、宝珠つまみでかえりのついた蓋に対応する杯と考えられる^②。161は須恵器甕である。体部外面は回転ナデおよびナデ、内面には同心円文がのこる。口縁部内外面は回転ナデを施す。口径18cm。162は須恵器高坏である。杯部内面はナデ、その他は回転ナデで仕上げる。口径12.4cm。163は土師器皿か。摩耗のため



第27図 S X 05平・断面図



第28図 S X 05出土遺物

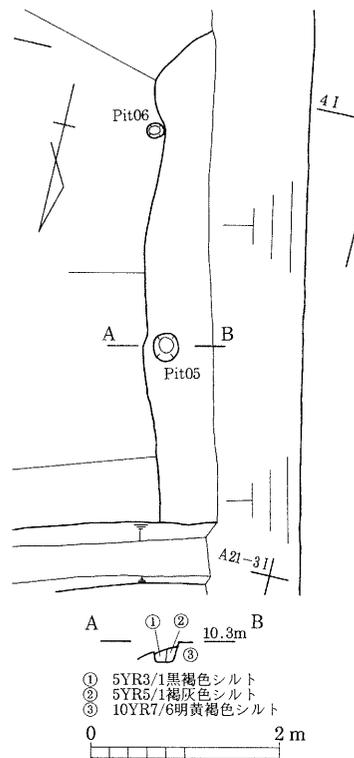
め調整は不明。底径16cm。164は土師器鉢である。体部外面は丁寧なナデのち下半に横方向のヘラミガキ、内面はヨコナデのち2段の斜め方向のヘラミガキを施す。口径14.4cm、器高6.5cm。165は土師質釣鐘形真蛸壺である。吊り手部分は粗いユビオサエで仕上げる。166はファイゴの羽口であろう。先端部分と考えられ、器壁外面は被熱したためか、胎土が発泡したかのようにただれ、外面は全体に還元色を呈する。外面で直径を復元すると3.2cm程になる。

土師器皿でやや新しいものがみられるが、おおむね7世紀中頃に位置づけられよう。

第5節 2層上面の遺構（第29図、P.L.9）

1. P i t 05・06 A21-3 I 付近の2層上面で検出した。検出面は標高10.3m前後である。検出面の直上は堤体盛土で、検出面自体が盛土を行う際に、削平された可能性が考えられる。P i t 06の埋土は褐灰色シルトで、P i t 05には柱痕が確認された。2層上面においてこの他にピットは検出されなかった。遺物は出土していない。

これらの遺構から遺物は出土しておらず、直接的な年代を示す資料は得られていないが、直下の3・5層上面で検出された遺構の年代から、これらの遺構の年代の上限は7世紀後半となる。



第29図 P i t 05・06
平・断面図

参考文献

- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
古代の土器研究会編1992『古代の土器1 都城の土器集成』

注釈

- ①大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・II』の表紙掲載のもの。
②泉南市教育委員会1997「96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』のP.L.12-5の遺物。

第5章 まとめ

6層上面において、弥生時代前期の遺構面と考えられる層位を確認した。遺跡内では、はじめでの確認例となる。出土遺物から、6層は滋賀里Ⅳ式以降に、5層は長原式期～弥生時代前期にそれぞれ位置づけられる。今回の調査では6層上面での精査を行わなかったため明確な遺構は検出できなかったが、焼土層の存在や5層の状況から、遺構面として考えてもよからう。

なお、5層および6層において検出された縄文時代晩期および弥生時代前期の土器は、層位的な上下関係が把握できる資料である。このうち5層と6層については、層位的な上下関係が時期差を表すものと考えてよいであろう。ただ、5層から出土した土器については、遺構面と考えられる6層上面に堆積した一連の層位（5層）から出土したものであり、出土層位における上下関係が、時期差につながるとは考えにくく、共伴関係として捉えた方が理解しやすい。

流路埋土や遺構から、弥生時代後期後半～末、7世紀後半頃の集落域の存在が想定できた。

流路2-3層の出土状況から、弥生時代Ⅴ様式後半から末頃の集落域の存在が想定できる。さらに、隣接する95年度調査区では、河道1から庄内式併行期～古墳時代初頭の遺物が確認されており、弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで継続的に集落が営まれていたと想定できる。

流路2-2層およびS X05出土は7世紀後半頃に、S X01は7世紀中頃に位置づけることができる。また、95年度調査区で確認された河道1では、7世紀後半～8世紀前半頃の遺物が確認されている。77-1区で確認された流路左岸の集落は、7世紀後半以降8世紀前半まで継続的に営まれた集落と考えてよからう。

なお、77-1区では平安時代の遺構も確認されているものの、これまで双子池の堤体改修に伴う調査では、平安時代における遺構は確認されていない。今回の調査で検出したP i t 05・06は、層位的には7世紀後半代の遺構面より上層にあたることから、可能性としては、77-1区で確認された平安時代の遺構と対応するものかもしれない。また、上記の仮定が成り立つのであれば、2層の堆積状況（調査区断面A-B間）から、77-1区で確認されている7世紀中頃から8世紀前半の集落と、平安時代の集落との継続性は認めがたい。

遺跡内において、平安時代頃を境に前代と異なる点がある。集落域縁辺を流れていた流路が埋没していることである。第1章でふれているが、平安時代頃を境に集落域が遺跡内において大きくふたつのまとまりをもつようになる。平安時代頃の流路の埋没、つまり遺跡内の高燥化が利用可能な土地面積の増加につながり、集落域の拡大につながったとも考えられる。さらに、今回の調査で確認した流路の埋没過程と、第1章でふれた遺跡内における集落域の変遷をあわせ見ると、遺跡内における集落域の変遷は、地形的な環境に強い影響を受けているとも考えられる。調査で確認した弥生時代前期と考えられる6層上面と、弥生時代後期後半および7世紀後半頃と考えられる3層上面、おそらく平安時代と推測できる2層上面の各遺構面の間には、いずれも礫層が堆積している。礫層の堆積が流路の氾濫を示すものであれば、当遺跡における集落域の変遷は自然環境の変化にある一定影響を受けていたの仮定も成り立つ。

図版



調査区全景（下が北）



南から



東から



北から



西から



北から



同上



調査区南半
(北から)



同上



全景
(北から)



同上
(南から)



出土状況（南から）



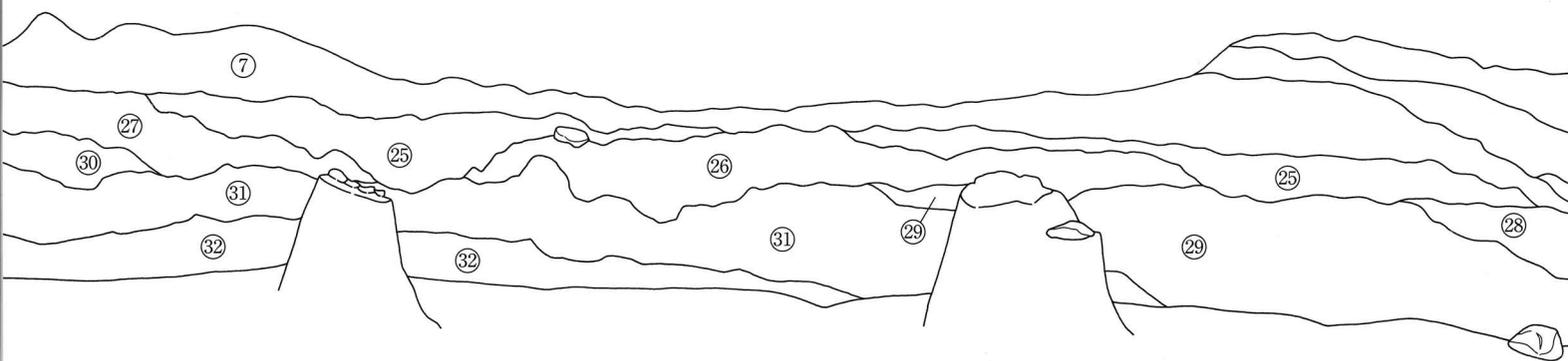
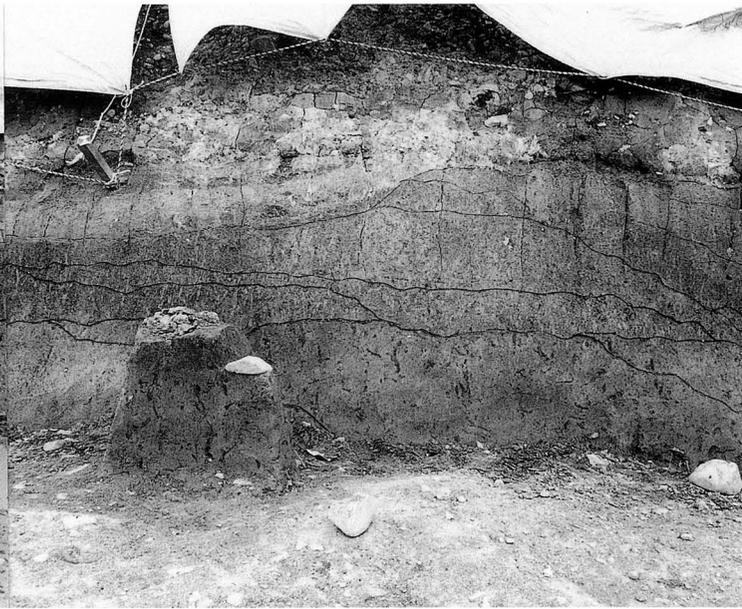
同上



9 (東から)



奥：9、手前上：10、手前下：8 (北から)



断面 (東から)



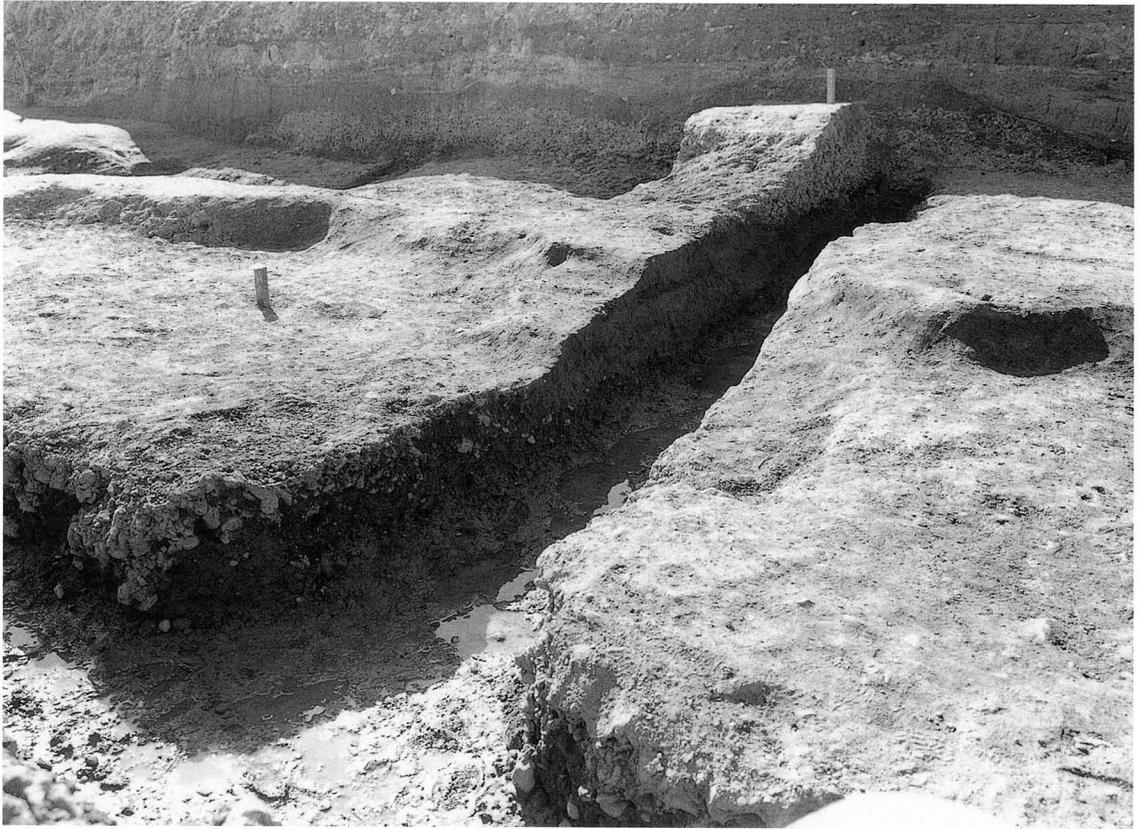
調査区西側断面北半
(北東から)



出土状況 (同上)



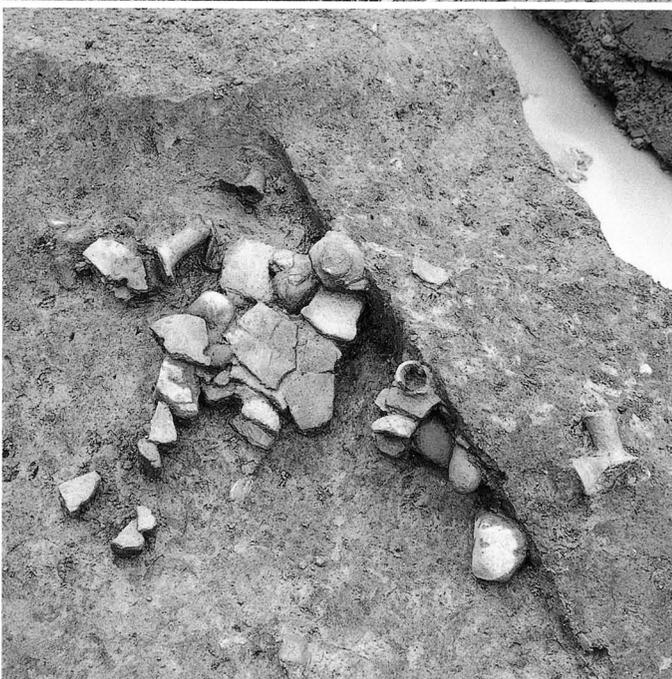
細部 (同上)



調査区断面A-B間
(北東から)



Pit05・06 (同上)



流路1土器出土状況

左：東から 右：北東から





流路2
(南から)



同上
(南から)



同上
(北から)



3層土器出土状況（北から）



同上（南から）

同上



2層土器
出土状況
(南から)



同上
(東から)



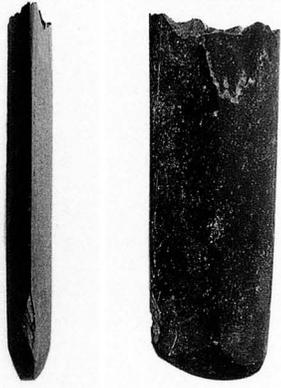
流路2断面
(北から)



SX01-04、Pit01-04 (南から)

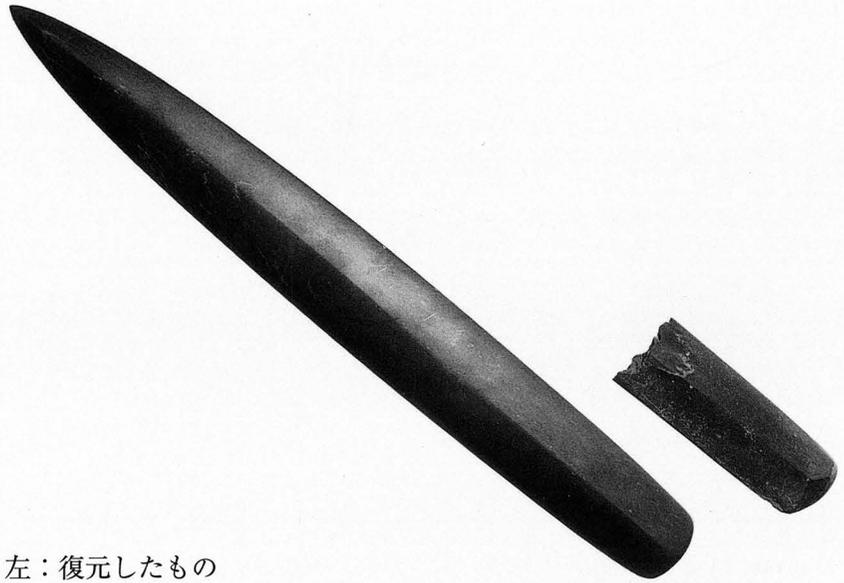


SX05 (北から)

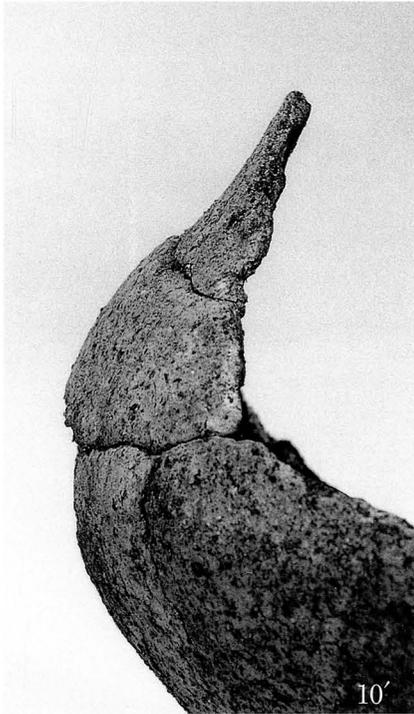


19'

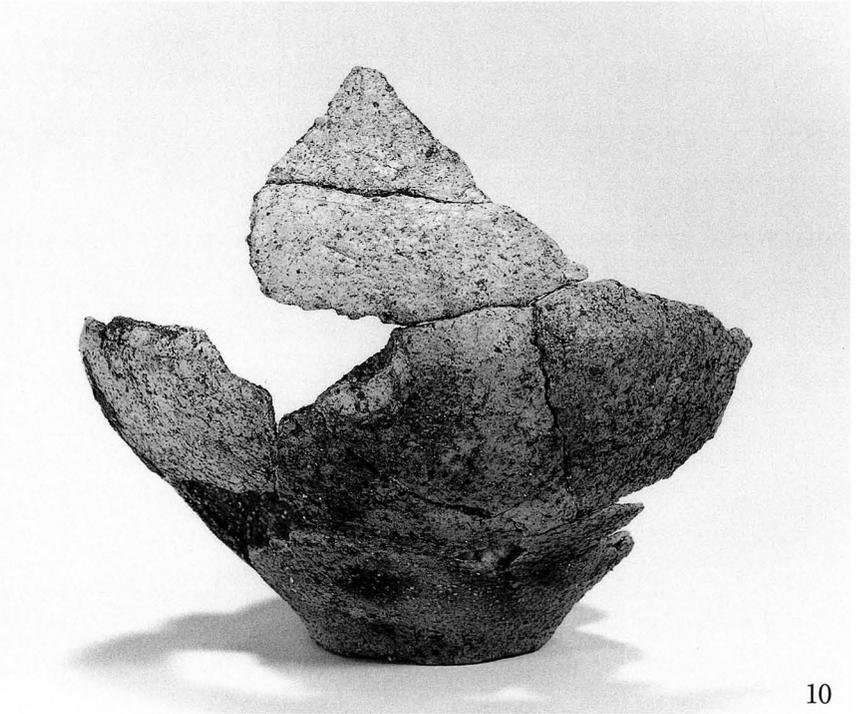
19



左：復元したもの



10'



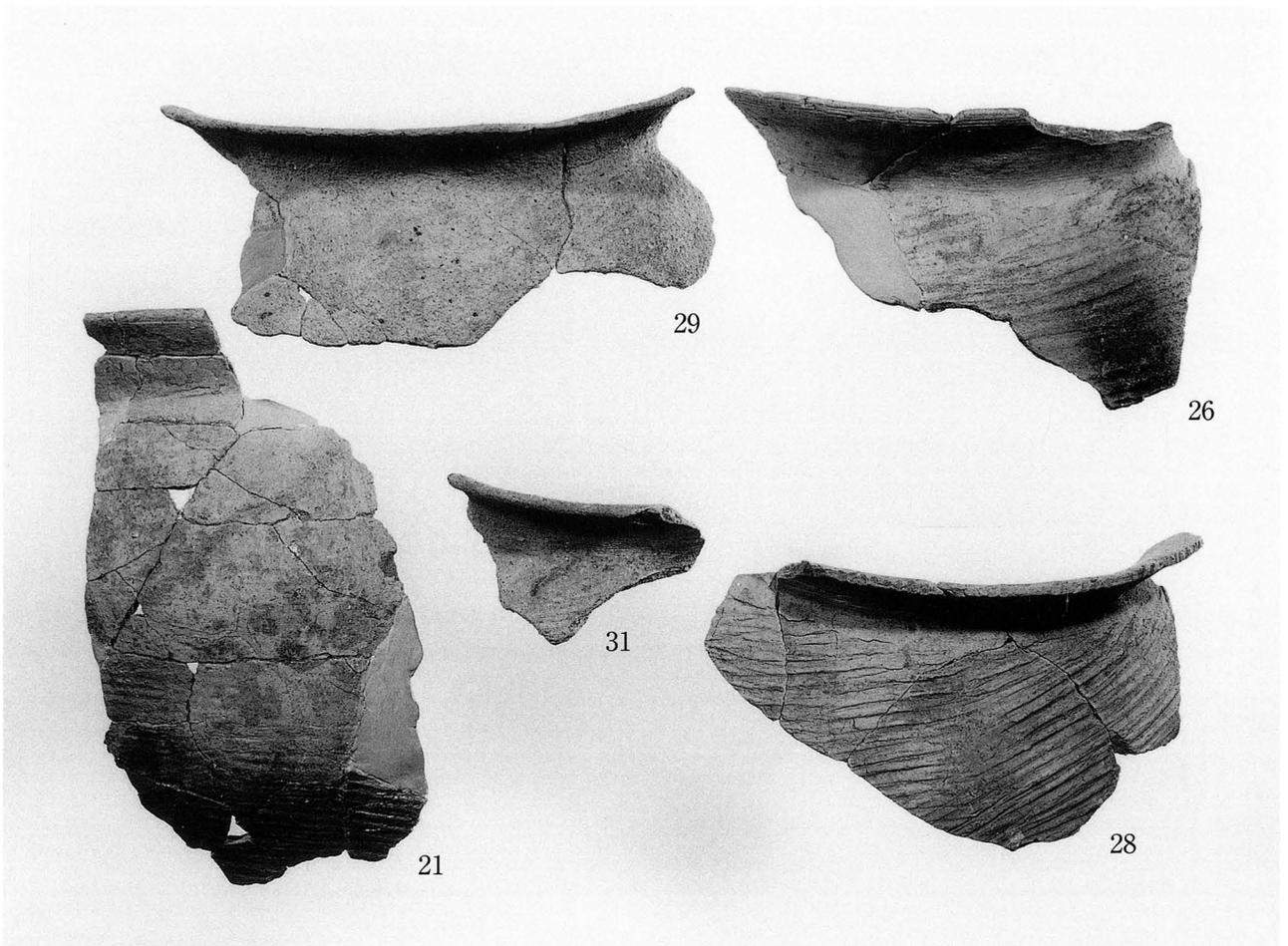
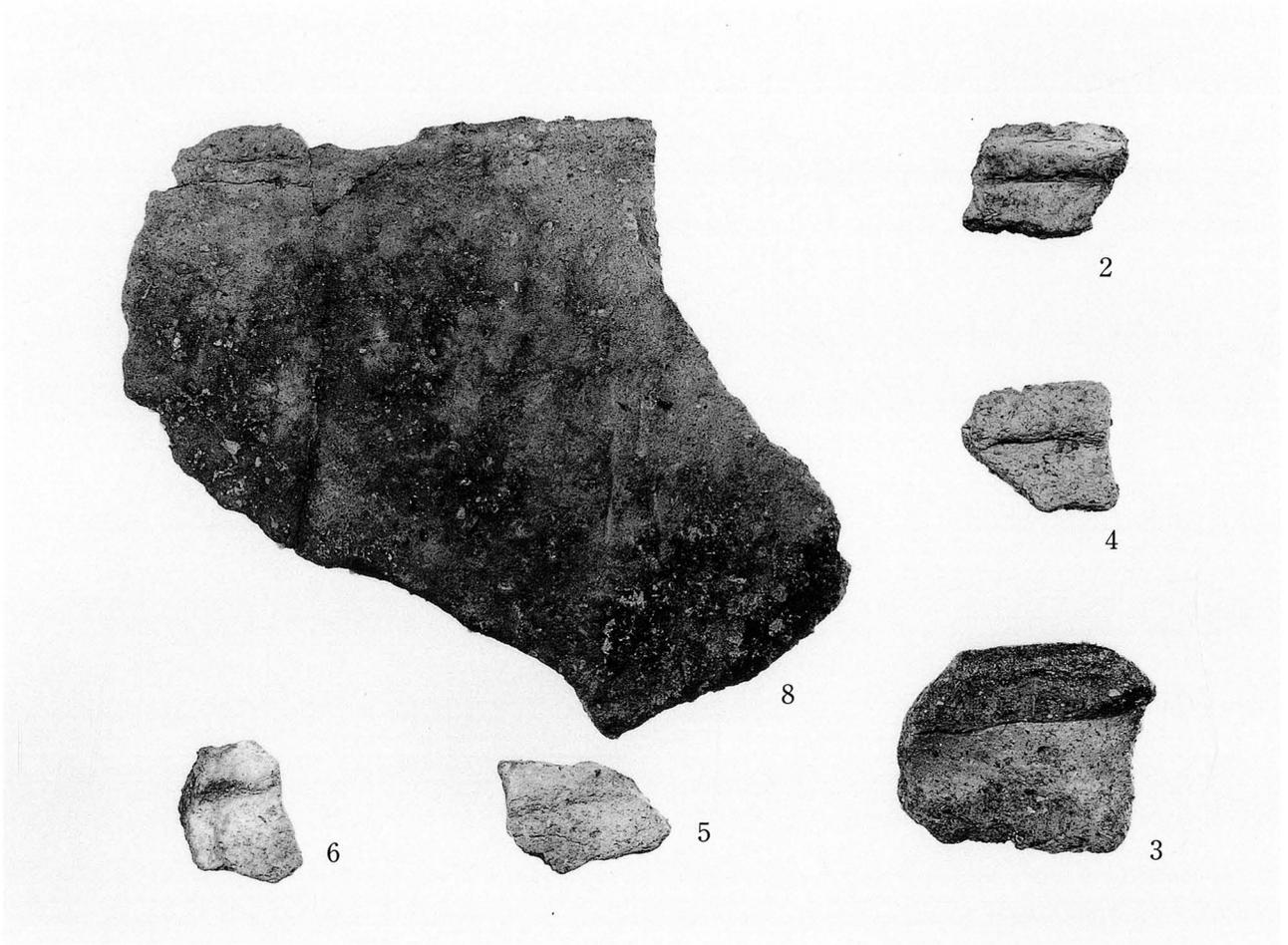
10



9'



9





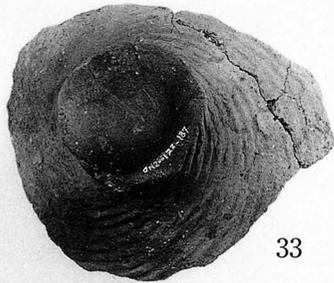
38



39



36



33



34



41



40



42



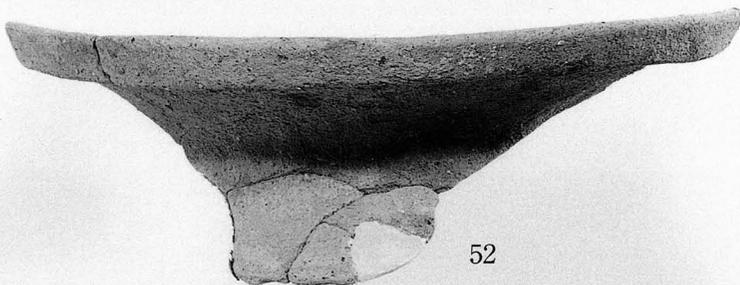
43



49



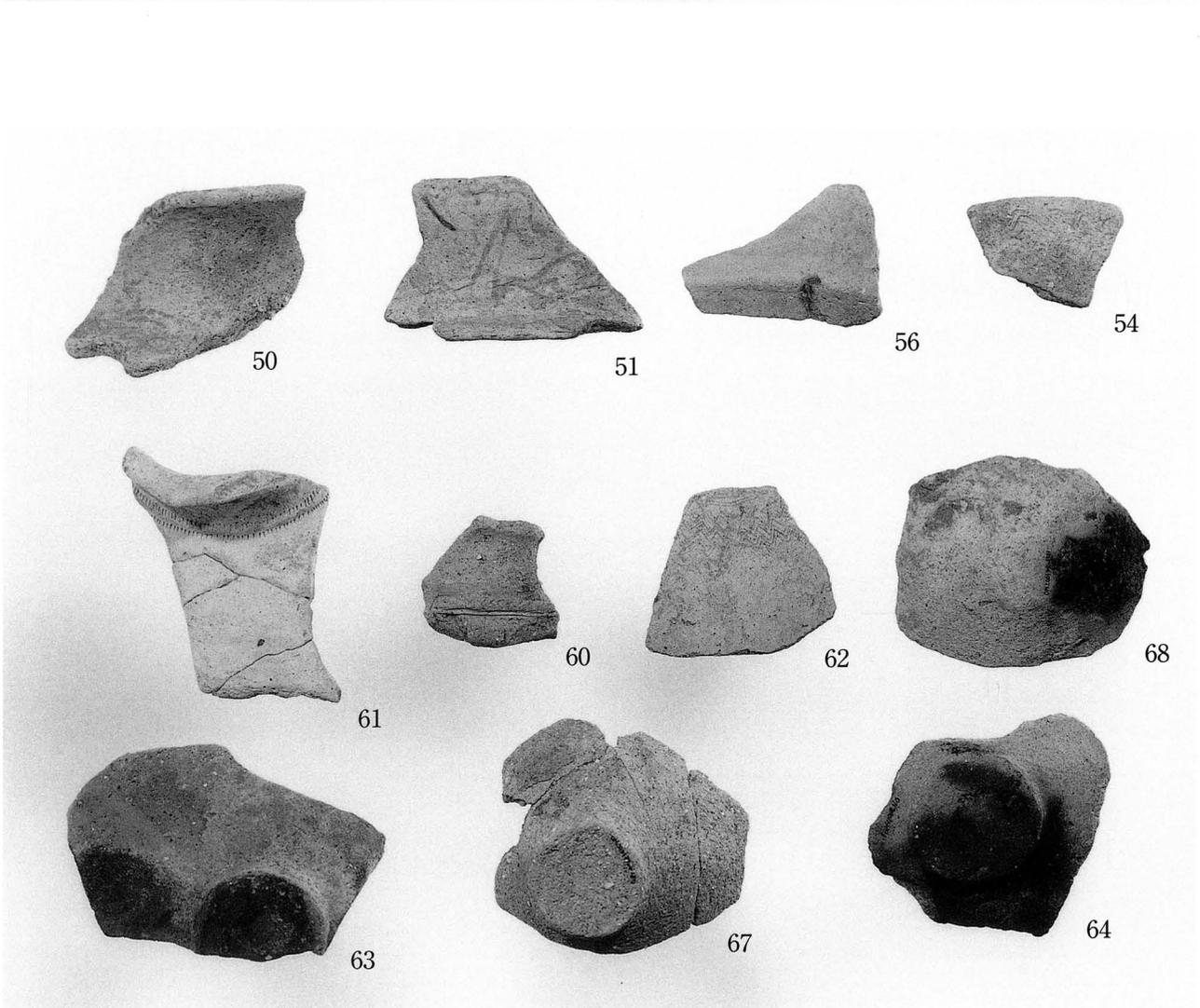
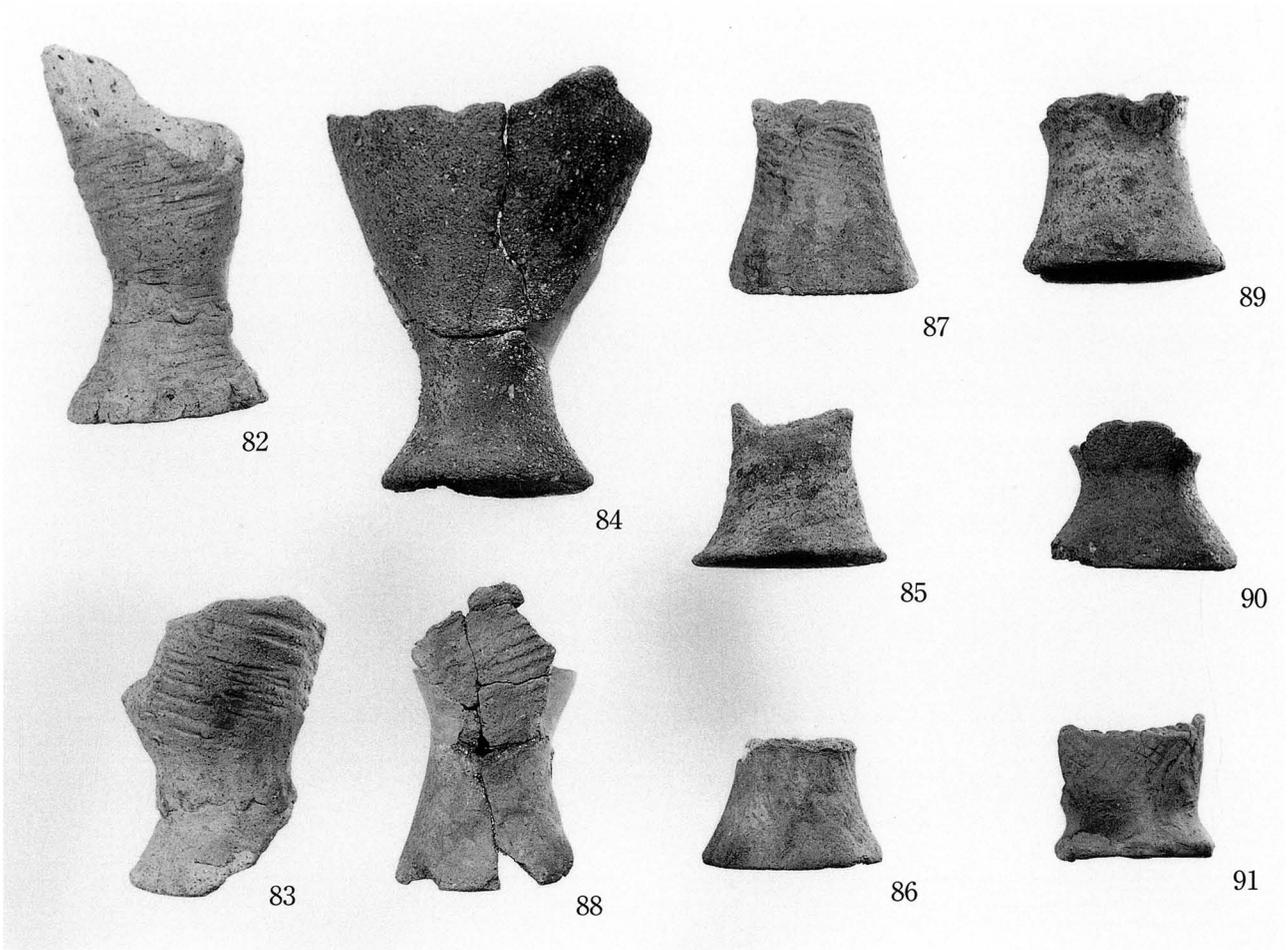
48



52



55

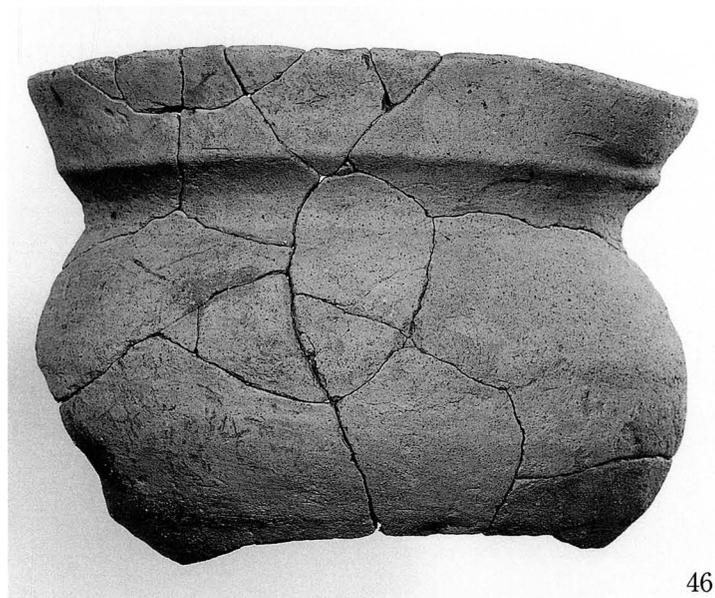




22



23



46



71



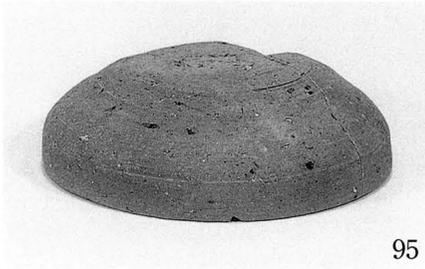
72



73



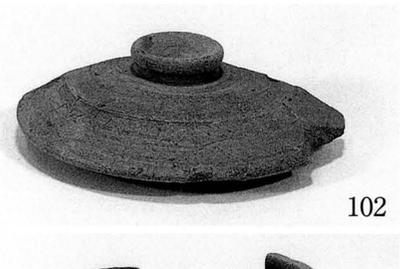
79



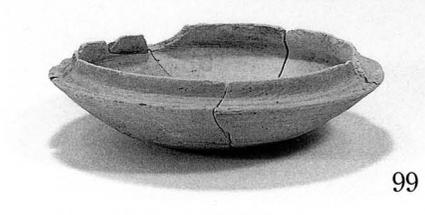
95



98



102



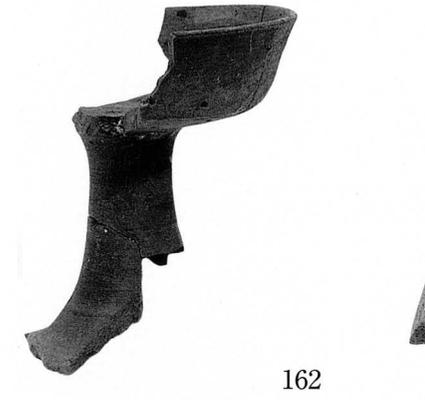
99



100



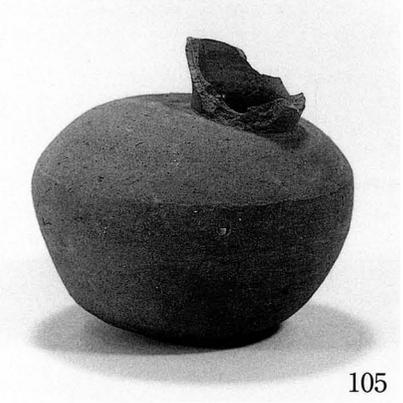
104



162



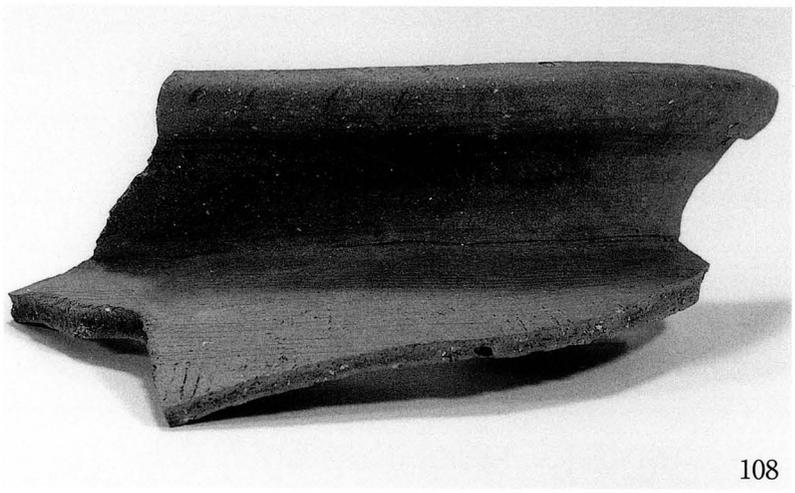
106



105



103



108



106



107

報 告 書 抄 録

ふりがな	おのさといせきはくつちょうさがいよう・VI
書名	男里遺跡発掘調査概要・VI
副書名	府営ため池等整備事業（泉南II地区・双子上池）に伴う
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	河田泰之
発行機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06 (6941) 0351
発行年月日	西暦2002年 3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさといせき 男里遺遺	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 おのさとちない 男里地内	27228	12	34° 21' 30"	135° 15' 40"	2001年10月 ～ 2001年12月	580	ため池堤体 改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡	集落	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代晩期 ～弥生時代前期 ・弥生時代中期中葉 ～後葉 ・弥生時代後期末 ・7世紀中頃～後半 ・7世紀後半以降 	自然流路 自然流路 自然流路・不明 土坑・ピット ピット	縄文土器・弥生土器 弥生土器・磨製石剣 須恵器・土師器・フ イゴ羽口・土錘・釣 鐘形蛸壺 なし	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文土器（晩期） と弥生土器（前期） が出土。 ・遺跡内ではじめて 当該時期の遺構面 を確認。 ・遺跡2例目の磨製 石剣出土。

府営ため池等整備事業（泉南Ⅱ地区・双子上池）に伴う

男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2002年3月29日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

